

Voice of Design

Vol. 18-1

日本デザイン機構
Japan Institute of Design

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156
http://www.voice-of-design.com E-mail:info@voice-of-design.com

特集

Voice of Design トークサロン 「今の共有」



後藤新平 (出典：国立国会図書館デジタル化資料) Shimpei GOTO

目次

- ・ 特集1 Voice of Design トークサロン2 2
大宅映子さんと2時間
- ・ 特集2 Voice of Design トークサロン3 17
向井周太郎さんと2時間
- ・ 事務局から 32

Special Issue

Voice of Design Talk Salon
"Sharing the Present Time"

Contents

- ・ Voice of Design Talk Salon 2
with Eiko OYA -----1
- ・ Voice of Design Talk Salon 3
with Shuntaro MUKAI -----17
- ・ From the Secretariat -----32

Special Issue 1 Talk Salon 2 with Eiko OYA

Thinking about a Vision now
- Why can't a Clear Vision be Put Forward Now in Japan?

Opening speech : Seiichi MIZUNO, JD president, president of IMA

We began our Talk Salon "Sharing the Present Time" one year after the Great East Japan Earthquake. Now is the time when private sector design organizations such as ours should put forth visions for the future Japan and proposals to realize them. In reality this should be the responsibility of politicians and government officers. However, as we have learned that we cannot expect much from them, I hope we will involve ourselves in considering the future vision of Japan through our discussions with Ms. Oya.

Introduction : Kunio SANO, JD auditor, industrial designer

The title of the Talk Salon today is "Thinking about a Vision now - After the great

特集1 Voice of Designトークサロン2 シリーズ：「今」の共有
大宅映子さんと2時間「今、〈ビジョン〉を考える」
 なぜ明快な〈ビジョン〉が出ないのか

期日 2012年3月22日（木）
 主催 日本デザイン機構
 会場 アルカディア市ヶ谷 私学会館

開会挨拶

水野誠一 JD理事長 IMA代表取締役

今日は皆さんお忙しいところお集りいただきありがとうございます。震災から一年を迎えるにあたり、私たちはトークサロン「今の共有」を始めました。今は、民間のNPOやNGOや我々のようなデザインについて考える組織がもっといろいろな提言をし、ビジョンを出さなければいけない時であります。本来は政治家、あるいは官僚がビジョンを打ち出すべきですけれども、それが期待できない今、我々がもっとそれに関わっていかねばいけないことを、大宅さんの話とともに、皆さんにも大いに考え、そして発言をしていただく充実した2時間にしたいと思っております。よろしくお願いいたします。



主旨説明 佐野邦雄

主旨説明

佐野邦雄 JD監事 インダストリアルデザイナー

ボイスオブデザイントークサロン第二回を開催いたします。テーマは「今の共有」で、これからもシリーズで進めていきます。

今回は評論家の大宅映子さんをお招きして、タイトルを「今、〈ビジョン〉を考えるーなぜ明快なビジョンが出ないのか」としました。

3.11の被災地では復興の基本方針を早く出せという声があがり、国内では「がんばれ東北」がいつの間にか「がんばれ日本」になり「絆」という言葉が溢れています。原発事故を含めて大災害を私たちは実感して、日本はここで大きく変わるのではないかと人々が感じる中、その絆の先の国の明快な中長期ビジョンはまだ出ておりません。そこで、私たちにあってビジョンとは一体なかと自身が根本から考える機会をもち、将来を考えるきっかけにしたいと企画しました。

ビジョンは自立した個人が持つことに意味があって、国家によるビジョンはいいらないという人もいる一方で、こういうときこそ創造的なビジョンが必要だという人もいて、意見は多岐にわたります。

今回、大宅さんをお願いした動機は東

日本大震災にあります。復興を考える時、大正12年の、今から89年前の関東大震災の時に、内務大臣兼帝都復興院総裁として東京復興計画を指揮した後藤新平(p.1写真)を多くの人が思い浮かべたことと思います。去る2007年に後藤新平生誕150周年を記念した催しがあり、中核となる討論会の議題が「今、日本をどう立て直すか」でした。そこに、大宅さんが出られて、政治家やメディアの本来の役割に触れた後に、「後藤新平が言うように、人が一番大事である。国民一人一人の総体が国家だ。改革は誰かがやるのではなく、いかに自分が関与できるかだ。責任を負いながら国民が声をあげることが大事だ」と発言されました。それを今回の「今、〈ビジョン〉を考える」というテーマの核心でもあると私は考えました。

大宅さんは評論家として大所高所の視野と同時に、個人の立場でのキレのよい論評を皆さんもテレビでご覧だと思います。政府の審議会委員も多く務められ、政策立案の仕組みや過程にも詳しくいらっしゃいます。

earthquake and the nuclear plant accident, people are feeling that Japan may go through a dramatic change. However, no mid-term or long-term visions have been proposed by the government. We chose this subject for our talk salon so as to create an opportunity for us to consider "what a vision means to us" as well as a trigger to think about our future.

Some people consider that visions are meaningful for independent individuals and that a vision by the national government is not necessary. While other people see that a creative national vision is required, especially in difficult times like today.

When we consider ways to rehabilitate the earthquake-ravaged area, we immediately remember the late Shimpei Goto (p.1) who directed the Tokyo Rehabilitation Plan after the Great Kanto Earthquake in 1923 as the Minister of Interior Affairs and the chairman of the Imperial Capital Reconstruction Department. An

event to celebrate his 150th birthday was organized in 2007 which included a discussion of "how to revitalize Japan." Ms. Oya was present at the meeting as a speaker. After having touched upon the basic roles of politicians and the media, she said, "as Shimpei Goto says, individuals are the most important. The aggregate of individuals is a state. We cannot rely on someone else to reform our society. Each individual member of society should be involved in the reform. It is important that individuals should speak out while performing their responsibilities in society." I think this comment is the essence of the subject of today's meeting.

講演 日本的ビジョンとは何か

大宅映子 JD理事 評論家



いるような話で、こんなことをやっていると何も変わるはずがない。だから私は風穴を空ける役で、いかに日本を個人の意見を言える個人がリードするかたちにしていくか、それがずっと私の命題なのです。

私の取り柄は別にありませんが、大宅壮一の家に育ちま

ビジョンは個人から

さて、すごい題を与えられて、どうしようかと、しばらく悩んでおりましたが、私はいつも自分のスタンスを考えていて、一つは地球サイズで考え発言すること、もう一つは個人、個のレベルで考えることが必要だと考えています。なぜ、個のレベルで考えることが必要と考えるに至ったかという、紹介いただいたように審議会に入り、色々やりました。審議会は様々な分野で活躍する人を入れ、国民の意見を政策に反映させるのが建前で、私が入っている頃は実はお役所がやりたいことを言わせる隠れ蓑だったりするわけです。まんべんなくバランスをとるために様々な分野から選ぶのはいいけど、私は入った以上は個人の意見を言うものと心得ていました。ところが入ってみると、大企業の集団から来る人たち、中小企業の代表で来る人たち、労働組合の人たち、学校の先生とか消費者団体とか、みんなバックグラウンドを背負っていて、個人の意見ではなく組織の意見を言うのです。ああ、こういうことか、と

思いました。組織の意見を言い張っていたらいつまで経っても個人に豊かさが通るようにはならない。1980年代の後半に国も、企業も豊かになったかもしれないけども私たちは豊かさが実感できない。個人に豊かさが通る政策決定がなされない。みんな既得権を持つ組織の意見ですから、豊かさは組織で止まってしまうのは当たり前です。私は幸い、食い扶持を稼ぐ人を一人確保しておりますので、馬鹿なことと言って追い出されても構わないわけです。ただ皆さんは属している団体から蹴り出されては困るのです。わかってはいるけれど、それをやっている間はダメだというのが、私が体感したことです。大企業の人が大企業の論理で物を言い、一方で中小企業代表がバツと手を挙げるから、これは議論になるかなと思うと、日本の場合はならない。まず「〇〇委員のおっしゃることは重々ごもっとも」私はあなたの敵ではありませんよと先ず言い、それでぐじゃぐじゃぐじゃぐじゃ話し、最後にちょっとだけ反対意見を言う。爪楊枝でチャンバラして

したので小学校2、3年生頃から新聞は5紙くらい、週刊誌、雑誌は山のように読んでいます。ちくちく読んでいてはとても間に合わないの読み飛ばす術を幸い得られたので、本は1冊1時間くらいで読めます。「この言葉がいい」という細かいことは全然関係ない。小学生のころ親父が新聞を並べて、「同じ事件でもそれぞれの新聞で書いているスタンプポイントが違うだろう。ことほどかように活字になったからといって信用するのではないぞ」と言われました。ですから、何かがあったらタテヨコナメに疑って、どうやって自分の意見を構築するか、こっこの事件があったらこっこの見方があるんじゃないか、というバランス感覚だけで私は生きてるのだと思っています。今のテレビが新聞を並べて人の禰で番組をつくっているのはわけが違うのです。

今度の震災前に期待に満ちて政権交代して、出だしはよかったと思います。すごい勢いで以前にやったものを全部バツという感じで突っ走り、これは何か新しいことが起きるかなと思ったら、ルー

Lecture : Is a vision really necessary for present day Japan?
Eiko OYA, JD board member, journalist

In considering my own position on many issues, I make it a habit to consider an issue on the global scale as well as on my individual level. The need for considering issues from the individual level was developed through my participation in various advisory committees of the government. These advisory bodies consist of representatives from the associations of large corporations, medium-size corporations, trade unions, teachers unions or consumers. They all shoulder the interest of their associations, and speak for their organizations. They rarely express their personal views. Therefore, the views of individuals have not been reflected in policy-making processes in any ministries. In the latter 1980s, Japan and business corporations may have become richer, but

policies to allow people to enjoy the fruit of economic affluence were not formulated. People have never felt that their lives have been improved. Naturally this is because the fruits of development have only reached the organizational level. I don't represent any particular organization, and I speak on behalf of myself. My personal aim for being in these advisory bodies is to turn Japan into a nation in which individuals' views may be heard and reflected in policy-making processes. Anyway, looking back on the recent prime ministers, I would say that Japan is not a country in which decisions are made by an individual person with strong leadership.

* What is a vision?

What is a vision? When Japan decided to open its doors after centuries of seclusion in the late 19th century, the Meiji

Voice of Design トークサロン2
大宅映子さんと2時間 「今、〈ビジョン〉を考える」

ピー鳩山さんができもしない連立方程式をできると言い張って、アメリカまでいって「trust me」と言い、でも結局できなくて、もとの自民党案に戻り、戻ったところか悪くなってしまった。せっかくガラス細工のようにそーとできていたものを、「最低でも県外」なんてできないことを言ってぶっ壊して辞めるはめになった。あの時に小沢さんも道連れにして辞めたことで私は鳩山さんを許した。その後も、自分はもう出ないと言ったから「よし」と、「あなたは死んだよ」と思っていたのに、ゾンビのように生き返って、へんに動き回って、もうほんとに「いい加減にして」という気がします。

そのあと菅さんになって、申し訳ないけど昔からあの胡散臭さが私は好きじゃなくて、みんなも期待度が高かった分、「どうなるんだこの日本は」「このまま行ったらどうにもならないぞ」とひどく落胆した。みんなの気がきゅっと引き締まるようなことでもない限りダメだよなって言っていますでした？ 飲み屋



で飲んで「なんか外圧、なんかなきゃいけない」と。すごいことが起きたにも関わらず、底を打つかと思ったら底が抜けた。一年経ってなにか変わりました？ 私は本当にこの国は不思議だと思い、つくづく考えました。結論から言いますと、やはり日本はリーダーシップのある誰かがものを決めていく国じゃない。世界中で、日本人は立派だとかなんだとか言われていい気分になっているのも変ですけど、メディアは悪いことは全然書きません。彼の地で言われているひどい話はいっぱいあるけど、「それは今書けません」と書かないで、みんなにいい話ばかりです。もういい加減「絆」もやめて。

また、どうして歌うたいとかプロゴルファーとかがみんな「私たちのやっていることで感動を与えたい」と言うのでしょうか？ 私は鳥肌が立って寒気がします。それは受け手が言うことであって、やる人が自分から感動を与えたいなんて口が裂けても言うなって、そう思いませんか？ どうしてそこまで不遜になったのか、気持ち悪くてしょうがない。この一周年の記念に番組がみんな、変に見え透いた押し付けるようにいう「絆」も感動も、がんばれもいらぬ。もう動き出さなくては。

日本にビジョンはあるのか

ビジョンとは何か。日本が鎖国をやめて開国した時に、欧米に負けている、追いつかなきゃいけない、じゃあ「富国強兵殖産興業だ」というのはビジョンでしょうか。ビジョンではなくかけ声です。で、戦争に負けてゼロになって、キャッチアップをしなきゃいけない、追いつけ追い越せと。あれもビジョンではないと思います。腹が減ったから飯が食いたいと言うのと同じであって、追いついた後にどういう国にしたいかというものが無い。だいたい欧米という言い方も、欧米も一緒なんてそんなばかな話はなくて、ヨーロッパだってそれぞれ違うコンセプトで国の運営をしているし、アメリカもそうです。アメリカのどういうところが良くてそこはもらいたい、ヨーロッパのこの国のここが良くてこうもらいたいというものがなくて、追いつき追い越せがクリアされた時に何も無いのは当然だと思います。

しかも、戦後は幸いと言うか、冷戦構造があり、その間は微妙にバランスが取れていた。日本は西側の一員と言えば楽チンだったんです。今考えても何も厳しい決断を迫られることはなく、政治的にはアメリカの言いなりとは言いませんけど、アメリカの判断に従っていれば良くて、日本自身がどう決断をするのか言ってみ給えというようなことは言われなくて済んだ。経済的には、日本は徹底的にやられて、みそっかすなので、まあ少し大目に見ようじゃないの、良くて安いも

government took a policy of increasing wealth and military strength and encouraging industry in order to catch up with the West. Was this a vision? No, it was only an immediate goal. After the defeat in WWII in 1945, Japan had to begin its rebuilding the nation out of devastation to make up for the loss and catch up with advanced nations. I don't think there was a vision for the country at that time either. There was no picture as to what kind of country Japan would become after catching up with other nations. In the cold war regime after the war, Japan became a member of the western block, and followed the policies taken by the US government with few occasions to make serious decisions on its own. Japan struggled to achieve economic growth modeling itself after Germany in the manufacturing of cameras, Switzerland for watches and America for automobiles, being called an "economic animal." Thus, the economy rapidly grew, and the nation

became rich. However, the government saved the profits in the name of trade surplus trimming, but when the US government suggested that Japan should increase domestic consumption, the government used money to construct roads in less populated mountain areas instead of spending money for people to enjoy the results of economic growth. If there had been a good national vision, the money would have been used for better purposes, and we may have become better off.

* Egalitarianism ? the same as others

Under the flag of balanced development of the land, an enormous amount of money was spent on infrastructure development to model all cities in the country after Tokyo. Was this a vision? The Japanese are poor at prioritizing. There may be tenderness to care for others. We think it unfair to pour a great amount of money

のなら買ってあげるよという国々があったおかげで日本はエコノミックアニマルと言われるように、ドイツからカメラを、スイスからは時計を、アメリカからは自動車を取りというかたちで奇跡の回復をして経済成長をしたわけです。だけど、そのお金はのべつ黒字減らし黒字減らしと言って貯めて、一人一人に豊かさが通るようなお金の使い方をしないで、アメリカから内需を拡大したらどうですかと、なぜアメリカから言われなきゃいけないのか。国民のために使ったらどうだと言ったらタヌキ道路とかキツネ道路とかにお金が使われて、結局一人一人に豊かさが届かない。今頃になってあのお金を上手に使っていたらどのくらい、それこそビジョンがあったらどのくらい良くなっていったかと思えます。

つい最近、久しぶりに下河辺（淳）さんの顔写真が載っていて「おお、まだお元気でいらしたのか」と思いましたが、国土の均衡ある発展が旗印で、あれもビジョンだったのでしょか。日本をまんべんなく東京のようなものにしようということが。でも基本的にはそういうつまらない発想でお金がいっぱいばらまかれてしまった。日本はメリハリをつけるとか優先順位をつけることができないのです。これが一番の根っこだと思います。平等のはき違えでエリートと言ってもいけないとか、できる子だけ集めて何かするなどんでもないとか。そりゃ弱い人、力のない人に手を差し伸べるのは重々必要ですけど、それをあまりにもやりすぎ

ると似非弱者が跋扈する。日本人は心根が優しいから、私はいいけどあの人たちが可哀想だというのが必ずでてきて、どこかにドンと集中的にお金をかけてそこだけを振興させるというのは不平等だと思っている。だから、当時の大蔵省の予算にしてもカットするとなると必ず一律10%カットみたいな話で、どこかに集中して、ここは全部削るとかいう決断ができないからお金が有効に使えないでずっと来た。そのおかげで誰も落ちこぼれず、誰も突出せず、一人勝ちしないという、こんなにまんべんなく行き渡ってシェアする国はないと私は思っています。

みんなと同じでは先はない

今は格差がひどいといろいろ言いますが、どう考えても日本ほど幅が狭い国はないと思いますし、私たちは欧米がいいとずっと刷り込まれ、ビジョンがなければいけないと思ってききましたけど、もしかしたらそうではないのかもしれない。誰かがリーダーシップを持って旗ふってそれに従うのが楽、楽は楽だけれども、どうも日本人はそれを欲していない。

河合隼雄さんが昔、日本のおとぎ話や神話は「中空構造」だといいました。日本の場合は3人いたとすると真ん中の人というのは実は一番大事だけど、何も言わない。両端の人が引っ張っていく。日本の意思決定システムというのは良くわからなくて、山本七平さんに言わせれば、空気が醸成されてものが決まる。ものが

決まらないなら何も動かないはずなのに、みんながなんとなくそうだなあ、と思うとなんとなく決まって日本は多分運営されてきていると思う。強いリーダーシップを持つ人が出てくるとすぐにヒトラーと言われてしまう。狩猟民族的に俺が獲物を捕ってくるから捕ってきた俺が分配してやるみたいなのは基本的に日本人は好きじゃない、という気がしています。

では、それでいいかというところではないわけで、誰も一人勝ちせず誰も落ちこぼれずという、こんなに優しい社会はないので、いわゆる狩猟社会のような弱肉強食が優先しているそれに、もし対抗するのであれば説得できなければダメなのです。彼ら欧米のシステムの中では談合は悪ですけど、談合を「失業しないようにみんなで仲良く仕事をシェアすること」と考えれば、ものすごく優しいシステムかもしれない。だけど、強いものが捕って当たり前という人たちにそれをどうやって説得できるか。そこに掛かっているのではないかと考えています。日本の場合の公正取引委員会とか個人情報保護法とか、もらってきたいろんな法律とか組織とか、どう考えても運用が変だと思うような、日本人のメンタリティにあわないことをいっぱい輸入して、それが身に付かないけど、でもそれが世界だからやらなくてはと思っている。私たちは本当はそうじゃないよ、と思いはじめている人がかなりいると私は思っているけど、だったら日本的方式で

into one thing at the expense of others. So, the Ministry of Finance curtails all budget items by ten percent uniformly. As a result, nobody is left behind, and nobody stands out. Gaps between the rich and the poor are widening in the world, it is true with Japan as well but the gap is narrower in Japan because of this caring system.

I have been thinking that we should have a national vision. But now, I realize that we don't need one. It is easy to follow the words of a strong leader, but we may not want to follow a strong leader. The decision making process in Japan is ambiguous, but somehow an air is developed among stakeholders to reach consensus. The ill-famed DANGO (bid-rigging) practice is an evil business practice in the western value system but it is a system to share public work among companies in a specific industry, say the construction industry, to prevent some of them from becoming

bankrupt by distributing work assignments evenly. I don't mean to imply that I am in favor of this system, but it works well in the Japanese climate. The question is "can other nations that live by the law in the jungle, where the strong become leaders and make decisions, understand our way."

It is often said that the Japanese lack a sense of originality and creativity, but I don't agree with this view. Ancient Japan accepted cultures from China and Korea, and modified them to suit Japan. In this process, the Japanese have developed a "reactive attitude." When an incident occurs, we hardly take the initiative to act on it, but rather we react to someone's action. I don't think that Japanese lack creativity. The fact is that we do not duly appreciate those who have creativity. We are pleased when Japanese win the Nobel Prize, but many Nobel Prize winners won the prize for their researches in the United States. With their outstanding

大宅映子さんと2時間 「今、〈ビジョン〉を考える」

はない彼らに説得できるか、というのが一番の問題と思っています。

彼らみたいにピシピシとどこで決まって、今ここであなたたちは死んでいただきますとやった方が明快でいい、なんとなく決まるなんていうのはよろしくないとも私はやはりずっと思っていました。よく考えると日本にはオリジナリティがあるのか、と思ったりする。要するに文化的には中国と朝鮮からもらって、それを上手に日本的に変化させてものにしている。それは日本のものにはなっているが、いろいろなことが対応型というのか、何か事件があっても自分からはactしないで、re-act、何かに反応する。誰も何も言わない時から手を挙げて何かすることをほとんどやってきていない気がします。対象をみながら、いつも相対的で相対性原理のもとにやっている。今はだいぶ変わりましたが、日本の通信簿がずっと相対的でした。一クラスの中で何パーセントが5だという。すると、4の子も5の子も全員が頑張ったら3の子はいくら頑張ってもいつまでも3のままでしかいられない。それを絶対評価にして、3の子だけを見て、この子としてのものすごく努力をしたから絶対評価で5だということならいい。もう少し絶対評価みたいなことが必要だと色々な場面で言うてはきたのですができるのかなあ、という気がしています。

ただ、オリジナリティがないとは私は思っていないのです。日本人は独創性、クリエイティビティがないみたいな言い

方をよくされますけど、そうではなくてクリエイティビティのある人を評価しない社会なのです。日本人がノーベル賞を取るとみんな喜ぶけど、日本にいたままでもらった人は少ない。ノーベル賞を取るくらいの変った人は日本には居にくいわけです。人格も丸く、人付き合いもよく、それで頭が良くてノーベル賞を取りました、というのはいないのです。やっぱり変なやつが多いですから。日本では居にくいからよその国のお金で取るんで、これは日本人にとって恥だと私はいつも言っているんです。だからオリジナリティ、クリエイティビティがないのではなくて、それを何となく評価しない空気が日本にある。みんなと一緒という幅の中に入っている方がいい。突き抜けているのは変なやつ、という感じですよ。でも、違うから面白いんで、違うことに意味がある。この考えが、日本人に浸透したらだいぶ日本は元気になると思う。震災のあとに、「こたまでしょうか」ではなくて、同じ金子みすゞの「みんなちがってみんないい」をやってくれていればだいぶみんなの意識が変わったんじゃないか、すごくいいチャンスだったのに残念だなあと思っています。日本の場合は、違うというときに上下優劣にしてしまい、平等で、単に違う存在、単なるディファレンスは認めない。でも、いろいろな才能が違ってあっていいんです。色々な土俵で、色々な違いを愛でれば、子どもの違いの良さが生きると思うんですけど、みんな一緒がいいと言って、運

動会のかけっこに1等賞2等賞をつけちゃいけないとか、70mまでは全速力で走っていいけど、そこで足踏みして待っていて全員が揃ったら手をつないでゴールインするとか、50mのところにフラフープが置いてあってそれをくぐるのだから、親からももらったただ走る能力を査定したんじゃないとか。私が一番嫌いなのは、1周100mだとすると30m先に僕ちゃん遅い子ですって申請した子はそこから走るんですね。つまり70mしか走らない。ズルでしょ、そんなの。同じゲームじゃない。そんなにまでして勝たせなきゃいけないの。かけっこが早い子もいれば音楽が得意な子もいれば算数が得意な子もいるという、それが単なる違い、興味の違うんだから。

もっとすごいのは、幼稚園で浦島太郎が10人くらいでてるんですよ。シーンごとに浦島太郎は違うの。一人だけが主役を張るなんてとんでもない、という話。そんなことを言っているほうがとんでもないと思うのですが、そうやって育った人たちが、人の上に立つ立場や、政党の代表になったからといって急にリーダーシップが発揮できるわけがないのです。リーダーシップがいいものだと思うされずに育ったわけですから。今回のあれだけの震災があって、我々にとっての不幸だったのは、反権力、反体制という人たちが権力の座にいて、一番決断をして動かなきゃいけない時に官僚も使えない。決断力と実行力とそれこそリーダーシップが一番必要な時に対極にある人がトッ

intelligence and personality, they felt uncomfortable in pursuing their careers in Japan, and left Japan. They were different from people around them. We tend to think that people who are different from others in a community are strange. We should admit that differences among us enrich and enliven our society. We should appreciate differences in talent among people. Children will develop to their full potential in such an environment. But in reality, when we find differences in talent, we tend to rank them to find which one is superior. Hence, differences tend to be excluded, and egalitarianism is sought in Japan. People who have been educated in an egalitarian-oriented society can hardly develop distinguished leadership. It was unfortunate for us to have political leaders who have little decision-making and action-taking power to lead the government offices in times of emergency such as after the Great Earthquake and nuclear plant accident when we

needed strong leadership.

* People's initiatives at the time of emergency

I often felt irritated with the slowness of making decisions to help people affected by the earthquake and tsunami in 2011. I wondered why political leaders did not take extralegal measures to provide emergency relief. In a dire and helpless situation, a town took the initiative to build temporary houses using timber which had remained undamaged without waiting for permission from the local assembly. Thinking that the government would not be dependable, a small village in a mountain opened a website to ask for help, and constructed a 1.3 km-long road themselves with volunteers from other prefectures. A group of the wakame seaweed growers asked for contributions through the Internet, and was able to buy a boat to resume their cultivation. Had the

プにいたことだったと思っています。これは不幸としか言いようがありません。

人の上に立つ人はそれだけの責任がある、責任があるから名誉も与えられ、名誉と責任はセットになっていると思います。私たちが子どもの頃、自分が子どもだから政治家が偉そうに見えたんだろうかという、そうではないと思う。やはりそれなりの顔をしていたし、それなりの行動や、存在感があったと思っています。

後藤新平が大好きでいろいろ勉強もしたんですけど、後藤新平ばかり英雄のように言うのはいかがなものかと、全部がいいなんて言っていないし、大風呂敷なものもわかっています。だけど100年先のことを考えた東京のプランを持ち、震災が起きたら、たまたま市長だった時の計画書があるから即出せたわけです。だけど、それも分かっている延々何も出さないまま結局一年経っているこのすごさ。どうしたものだろうと思います。水野さんにも伺いたいと思う。みんなの心が本当に一つだったあの時点で、日本で非常事態宣言はできないんですか？ 超法規はできないんですか？ 後藤新平はあの時に土地を全部買い上げて私有権無しとかたちでやろうとしましたよね。つぶされましたけど。そうでもしないと瓦礫も全部所有者がいるとか、使えるかもしれないからリサイクルだとか、塩水でぐちゃぐちゃになった車をきれいに並べている。イライラするんですよ。

水野 首相は首長じゃないからできない

のです。アメリカの大統領は議会よりも上の立場で決められる。首相は全部国会にかけなければできません。日本だったら知事とか町長とか、首長ならできるのだけど、日本の首相というのは一番情けない存在です。これはおかしい。

大宅 やっちゃって、訴えるものなら訴えてみろって、やればいいと思う。私が総理だったらやるけどなあ。

自立への道

大宅 地方議会も経ないで、たまたま材木が残っているから仮設をつくりだした町がありましたよね。それから、南三陸の何十人くらいしかいない中山集落で、すぐにホームページを立ち上げて支援を頼んで、もう国には頼れないと、自分たちで1.3kmの道までつくって。それからワカメ漁のための船もネットでどこか売ってくれるところありませんかって、ついに300万くらいで買ってきて、そのお金も全部支援してもらって、自分たちでやり始めている。私もそれしかない気がします。だからあの時点だったらこの惨状なんだから税金を上げますと言えたでしょ。チャンスだった。もう今は無理ですよ。何かが起きたのにもっと悪くなったっていう感じで。パチンコ屋は満杯だとかいう話を聞いたら、どうしてもそこはできない、できないかもしれないけど、でも阪神淡路大震災の時に村山富市さんはこれは自分の手には負えないと、小里貞利さん（元防災担当相）を委員に任命して任せた。だけど報告は全部

上げてくれ、責任は全て私が取る、と。あの人眉毛だけじゃなかった、リーダーシップはあった。

それと放射能の問題は、これはもう人災だと思います。一人一人がやるべきだと言っていますが、やるためにはそれなりの知識が必要ですよ。この間も、テレビを観ていたら、若いお母さんが「子どもを放射能があるところで育てられません」と。じゃあ世界中どこにも行けないよ、地上には全部あるんですから。一切ゼロのところに行きたいと言っても、そんなのあり得ない。メディアはそんなところはありませんよと言わなくてはいけない、と私は思います。「正しく恐れる」ということです。

今回のことで私が一番体感したのは、専門家はあてにならない。政治家があてにならないのは分かっていたけど、専門家という人もあてにならない。原子力はトイレのないマンションでスタートしているわけですから廃棄物のことを考えていなくて、コントロールできないものを入れてしまったということはどうにもならない。でもどうにもならないけどもそれで動いていて、そこに依存している以上は、安全を確保しながらやってくしかない私は思っています。何か所か見に行っていますけど、その時にこれがダメになったらこれです、これがダメになったらこれですというのが五重にやってあります、コンクリートは何メートルで防御がこうなっておりますと言われたら、こちらはそれ以上の知識があ

government been clever enough, the period immediately following the devastation would have been a good chance to raise taxes. Now it is no longer a persuasive argument for raising taxes.

* The role of the media

We require scientific knowledge to protect ourselves from the radioactive pollution caused by the accident of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. A child-rearing mother was saying that she would like to raise her child in a place where there is no radioactive substances. But there is a place like that on the earth. As we know almost nothing about radioactive substances, we need correct information provided by experts through the media. What disappointed me was that we could not fully trust nuclear experts as they gave us misleading information. The media should also give correct scientific information to help the public determine

what they should do to avoid radioactive exposure.

* Enlightening people

Because of the prevalence of egalitarianism, few people emerge with the strong will and determination to take responsibility in doing things differently from others. Under the present democracy, people demand that they be given favorable social security benefits but they are reluctant to pay taxes. Political leaders cannot tell people that it is impossible. They often say that they risk themselves for the sake of the people, but in fact, they are always concerned about their next elections. We have no hope that our economy will regain strength. Currently, the national revenue is 37 trillion yen while the budget amounts to 92 trillion yen. Even an elementary school child understands that we cannot sustain our national finance. But politicians cannot say that this is

るわけじゃないから、そうですかとしか言いようがない。今になって色々出てきているのを見ると、分かっていなかったんですね。色々なことが、こういうことが起きたらこうなるって。あの人だって水素爆発なんかしませんって言ったんですものね。でたらめさん。で、未だに私たちの多くは放射能と放射線と放射性物質がぐちゃぐちゃですよ。

今の政権の人たちは特にそうだけど、国家が国民とは別にあると思っているんじゃないかと思うんですけど、私は国民全体が国家だと思っているんですね。だからここにいる人たちが変なのはやはり私たちが選んでいるからそうになっているわけで、だからといって一億総懺悔みたいな話になってもしょうがないんですけど、でもやはり一人一人の能力が落ちているということは総体としての能力が落ちざるをえないのです。昔は、一応エリートというか「分」というものがあったわけです。今「分相応」なんて言うと叱られますが、あまりにも平等志向がはびこりすぎたことが人と違う何かをやる人たちにとってのメリットがないっていうのかな。そうするといつまでもみんなと同じレベルだとそれだけの責任感も出ないと思うのです。一人一人がどのくらいの意志と決断とチャレンジ精神を持ち責任は自分で取るという強い個でいられるかどうか。今までの日本の民主主義はほとんどお任せでおねだりで税金は払いたくないけど社会保障はいっぱいやってくれという、どう考えても無理な話ば

かりみんな要求しているわけです。そんなことはできませんと政治家は言えないのに言えない。政治家は次の選挙のことしか考えていないように見える。政治家は選挙に落ちるとただの人、ただの失業者になるわけです。でもよく考えたら、そんな自分の身がどうなるかも分かった上で、国民や国のために身を賭してやるのが政治家でしょう。あの人たち身を賭してってしょっちゅう言い、何十遍も聞きましたけど本当に身を賭していない、次の選挙のことしか考えていない。でも、選挙云々で自分の生活、首がつながるということを一に考えるようではなくて、ダメならダメでそこまでは本当に全力でなんでもやるのが政治家じゃなかったのかと思います。

それと松下政経塾が松下幸之助さんの意志とは全然違う方向に動いている。大学を出たらすぐに松下政経塾に入って政治家になるという発想がどうしても許せない。政治を志すというなら日本中を歩いてみるとか、企業のシステムを分かりたいから一応企業に就職してみるとか、お金の流れだから銀行もやってみるとか、世界も見ようとかやった上でなら話はわかるんですけど、大学を出て即政治家になるの一番早いので政経塾、と。旋盤工じゃないんだから技術を習うという発想がどうも私には納得がいかないですね。

経済が悪い、いつ良くなるかわからないとき、税収が37兆で予算12兆というのを何年やり続けられのかというのは小学

生だって分かる話です。景気も何もかも関係なく国民負担が少なすぎるから、税金よりたくさんサービスの受けているからこうなっているんだと、どうしてもっとちゃんと言えないのでしょうか。国民はそれを受け止めるだけの力はあると私は思っています。ただ、国民の側でも変な既得権を持った大声を上げる人たちにメディアが振られているのが問題だと思います。だから、普通のそれこそサイレントマジョリティの人たちがどれくらい本気で一歩具体的に足を前に出すかということだろうと思っています。意志と決断をそれぞれ一人一人がしっかり持つことと、相対性じゃなくて絶対評価みたいなかたちで日本が評価システムとして、みんなと一緒にいいというのではなくて、変わっても何かやる人がいたらちゃんとそれを認めるとい、違うことはいいことだということかたち。強い一人一人がいろんなシーンでいろんな決断をする、その決断を集めたかたちだろうと思います。今、世界中でどこもビジョンは多分持てないんじゃないでしょうか。ブータンにグロス・ナショナル・ハピネス（国民総幸福量）がありますけれど、日本人がそこに行ってハッピーかと言ったらそんなことはあり得ないのであります。ただ、今までの延長線上に私たちが行く道はあるとは思えない。それを今私たちが見つけなきゃいけないのだけれども、それはあると私は思っています。人間というのは成長、進歩がなかったら生きていくのはつらいものがあると

because we receive more services than the taxes that we pay. I trust that most people are able to accept that fact if politicians were to explain it. What we need today is for the silent majority to take concrete steps forward, each with our own firm will and determination, and that we develop our a value system that accepts individual differences and sees them as good, to allow individuals to have self-will and determination, and to recognize that as individuals we do things differently from each other. Strong individuals can make decisions at different scenes. I am certain that there is a way we should go. But it is not on the extension line of the conventional way. We can hardly live without a prospect of growth and progress. But the growth that we seek is not a conventional one measured by such things as money or targets. It is a growth system into which a certain level of caring for others is to be incorporated. I wonder if we could make the

world understand such a system, but I hope we would put forward such a policy making system while the world remembers the polite and caring attitudes of the Japanese shown in post-earthquake relief efforts.

Discussion

* Politicians rarely talk about their visions

Seiichi MIZUNO (floor): The power of the prime minister is so regulated, and even at the time of the Great East Japan Earthquake, he was unable to take extralegal measures. That was a unique chance for Japan to change the existing system, but no political leaders would take the initiative for change, because they are too scared to do something unprecedented. The whole society appears to refuse strong leaders. I was surprised when I became a



思います。ただ、その成長が今までと同じベクトルではない、違うベクトルで違う尺度で数字とかお金とかじゃない、さっき言った談合、談合が本当にいいって心底思っているわけではないんですけど、なにかそういう優しいシステム、ある程度の優しさを決断の中に入れこむことを世界にちゃんと納得させられるかどうか。もしそれができるのであったら、日本は礼儀正しくて、強いものが勝ちだというのではない何かを持っているぞとみんなが思ってくれている間に何か打ち出せたらいいと思います。

今日はみなさんの議論を動かすためにいろんなことをいろんなふうに言ってみました。この後はお任せします。

ディスカッション

水野誠一（会場） 日本の政治システムに問題があるのは事実で、首相の権限は非常に限られて、本当のリーダーシップを持って超法規で何かをやることなどできない。あの震災は日本を変える唯一のチャンスだったと思います。ただ、実行するのが怖くて誰も変革のチャンスを生かせなかったのは、たいへん残念なことでした。これは政治だけではなく、社会のシステム全体がリーダーとカリエーダーシップとかを拒否拒絶する悪平等。私も政治をやっていますごく感じました。

そこでビジョンがないことについて議論したい。僕も政治家になってびっくりしたのは、実は誰もビジョンを語らない。ビジョンがないことの最大の原因は、今の選挙区制度だと思う。小選挙区制は、

下手をすると今の区長選挙よりも小さい範囲でやらなきゃいけない。私が橋本龍太郎さんと政治を議論することがあった。その時に橋本さんが「水野君ね、今我々外交とか国家とか言っているけど、選挙区に帰るとその下水をどうするかという話をしないと当選しないんだよ」と。「国家を論じた政治家が当選できない選挙制度はやはりおかしい、これは変えないとやはりダメじゃないかな」というようなことを言われていた。

それから先ほど言っている、首相が首長になる大統領制度。日本は天皇制度があるので大統領制度が入れないというけど、やはり国を代表するリーダーが国家ビジョンを堂々と打ち出せるしくみ。アメリカでは教書という形で発表していますが、このシステムをつくらない限り、政治家が勉強しようとも思わない。つまり発表する機会がないから。これは非常に大きな問題ですが、その辺について大

member of parliament (MP) to find that politicians seldom talk about visions. It is because of the current single-seat constituency system. MPs are much too occupied with their local affairs and have little time to discuss the national affairs and world problems. I wish that there were a system whereby the prime minister delivers a speech like the US president's State of the Union address. Then, he would be obliged to contemplate the future vision of Japan.

OYA: Another problem is the significance of having the House of Councilors. It should be the House of Good Sense in its true sense. As members are secured to serve 6 years without election, MPs in this House should be engaged in discussing long-term issues such as education, the environment and energy. They could also discuss a national vision. But today, they behave like a second House of Representatives.

Sano for Tomoko INUKAI: I would like to convey a message from Tomoko Inukai, a JD member and critic, which was sent together with her apology for her absence. She says, "A precondition for creating a vision is that individuals have a clear view of themselves, and the courage to express their views. No clear vision will be created in a society in which people are concerned about how other people behave. I am not in favor of nuclear power plants because they are dangerous, and radioactivity is beyond our control. A society that cherishes life and nature will save the earth. New technologies for alternative energy sources will emerge from such a society."

* Ambiguity

Kenji EKUAN (floor): Listening to your talk, I noted a negative tone. But when I collect these negative observations about Japan,

宅さんのご意見を。

大宅映子 もう一つ、二院制、参議院の問題だと思う。今まさしく衆議院と同じようになってしまっているからいらなし、反対ばかりして何も決まらないならいらなし。昔の貴族院は、全く種類の違う人、入り方も違うし、6年間選挙に恐れおののかないで、例えば教育だとか環境だとか、それこそ原子力をどうするみたいな話をやれる。本当に良識の府だったら存在してもいい。それこそ、ビジョンをつくることをやってくれれば。でも今は「のようなもの」になってしまっているからまったく意味がないんです。

佐野邦雄 (司会) ここで、日本デザイン機構会員の評論家犬養智子さんから、今日は都合で出席できないのですが、ペーパーが届いていますので紹介します。

「ビジョンを描くには前提がある。それは個人が嫌なものは嫌という明確な意志を持ち、思ったままを言う勇氣を持つことだ。他人の様子をうかがう社会に明確なビジョンなど出ない。原発は危険だから嫌。放射能は制御できない。生命を大事にする社会、自然を尊重する社会にすることが地球を救う。日本だけの問題じゃない。代替エネルギーの新しい技術もそこから生まれる」というメッセージをいただきました。

ビジョンの根底にあるもの

栄久庵憲司 (会場) 今、大宅さんの話を思い返して、一つだけお聞きしたいの

は、ずっとお話をうかがっていると否定的表現が多かった。ところが、否定をつなげてみるとフレキシビリティ、つまり、人の意見を聞く余裕が根底にあるんじゃないか。それはどこからくるのか、これからお聞きしたいところです。片一方から見ると今までのビジョン、明治以降のビジョンがあって、それに対してしっかりせにゃあ日本もという大宅さんのお話だと思うんです。ところが逆の、違う角度から、「今」を考えると、よその国から羨ましがられる生き方をしているわけです。それは経済的側面にしても秩序にしても、大宅さんが言われた否定的部分が実は逆に全部いい点に考えられるのではないか。それがあったからこそ「今」があると。もちろん私も全てがそうとは思ってはいませんが、今否定されたものをもし肯定したとしたならばそうなるであろうかと。それは十分考えられる。つまり、人がうらやむ国であるのにも関わらず、だからビジョンがいるんだ、と。だからそのビジョンはどこからくるのかについては、甚だ難しいというか闇で人を捕まえるような感じがするんです。そ



ういう点でちょっと批判的な表現になってしまいましたけど、「今」という文字を見ると今の否定的に言われたことが生きるうえでは実は肯定的なことではないかと。という点をもっている国もたくさんあるんじゃないか。その点で、じゃあなぜビジョンがいるのか、ビジョンの根底にあるものは何かということについて、乱暴な質問ですけどお伺いしたいなと。

大宅 私は栄久庵さんがおっしゃったことを申し上げたつもりです。今までは欧米がいいと、真似をしているのがいいと思っていたけど、談合がいいのかもしれないという言い方ですね。それから仲良しごっこがすごく優しいシステムだと。一人勝ちせず誰も落ちこぼれずっていう。ただしそれはそうじゃない人たちにどうやって説得するか、ちゃんと説得する術を持っていないと世界のスタンダードにはならない。

栄久庵 スタンダードで見ればね。

大宅 はい。私たちが普通だと思っていたことが、世の中から世界からみたらすごく評価されることなんだということが初めて分かったわけです。略奪しないとか、ちゃんと並んで待つとかね。私たちは当然だと思っている。だとすれば、それをみんなで考えて、それこそ「今」考えて、世界の目から見たらここが日本の良さだとすれば、程よい優しさですよ。程よい優しさをどうプレゼンテーションするか、ということかと思っています。

栄久庵 私も最近似たような悩みを持つ

there seems to be an underlying flexibility to listen to others, and accommodate ourselves to others. You have shown negative observations as to economic and governmental aspects. Japan has developed along with the policies put forth from the Meiji and post-war governments. Comparing the present time with the past, you said the present government should have a steadfast policy to direct the nation. But looking at the present Japan from a different angle, the Japanese are living a life that is admired by people in other countries from the aspects of economy and public order. All the negative observations you have made can be positive aspects of Japan. But still do we need a vision? Then what lies in the bottom of a vision?

OYA: I intended to say the same thing as you have just said. We admired western life, and have tried to imitate the western way of doing things. But DANGO may be a good system. To get together

for mutual benefit may be a good, considerate system. No one stands out as a successor, and no one falls behind. But if we do not have the means to make such a system understood by people who are not familiar with it, the system would not become the world standard.

EKUAN: Standard.

OYA: Yes. After the disaster, we realized that what we had considered to be a matter of course was something that would be given a high regard by the world. That we don't rob people of things in times of emergency, and that we line up and are orderly while waiting to receive food and other relief goods are not unusual things for us. If these attitudes are good points of the Japanese in the eyes of people of other countries, we need to present the attitude of caring for others which underlies such behavior.

ておりました。ちょっと古い日本を紐解いてみたらどうかと思ひまして、本居宣長、日本の学問のなかでは唯一の人であると言われる国学の代表的な大家ですが終戦の時にパッと消えてしまった。そのなかで、これはなぜ納得できるのかなと不思議でしょうがないのは「敷島の 大和心を人間はば 朝日に匂ふ 山桜花」。それだけでみんな「うーん」と納得。そういった性質とはなんだろうかと。もちろん、本居宣長の国学ばかりでなしに、それまで続いていた歌道ですね。万葉集の歌道から、特に古事記の分析をまとめて宣長が賀茂真淵と一緒に、古道というんですかね、そういう学問、国学をやったんですけど。2000年前からずっと続いてきた曖昧模糊、今から考えれば曖昧模糊だけど良くわかるという。その堆積が今、今日になっているんじゃないだろうか。だから、そういう点では、一時的に退いていたからかもしれないけど、いずれまた思い返されるんじゃないかな。何故かと言えば、今、桜のシーズンでそういう歌がもてはやされてくるとやはり絶対、歌の心は消えないだろうと。そんな長い間の伝統文化が染み渡ってDNAになったのか。DNAになって、それがちょっとまずい方向に動いた。しっかりせいよ日本も、まずい方にいったとしても、これは揺り戻しがあるに違いない。それこそ天を、天命を待つという感じがしてしょうがない。私の勝手な意見ですけど、いかがでしょうか。

大宅 おっしゃった曖昧模糊とか「そこ

はかとない」とか、これはどうやって説得できるのかな、と考えています。私、今日持ってきた本（『女の才覚—日本の女性が失くしてしまったもの—』）を書いたのは、若い世代と私たちの世代とすごく断絶していると思ったのです。わかっていると思っていることが「エエ、こんなことも知らないの」というのがこの震災の後でいろいろ分かったので、これはたいへんだと、私はすごい責任重大だと思って、古いものを、今はこの私でもまだまだと思う世の中になってしまっているから、少しいじわるばあさんをやらなくちゃいけないかな、と思って書いたんです。

栄久庵 私ももやもやとした中で、特に日本人の愛している茶道なら茶道の道。基層文化ですよ。その中で一番大事にされる言葉は「あはれ」。この言葉は本当に味わえる深い意味が入っている。それが基層になって俳句だとか柳柳とか、そういうものが日本の文化をつくりあげた気がするんです。しかしよく考えてみると、なにそれというふうに言いたくなるようなことがあるんですけど。ところがそれでも、肌で感じることもあるんですね。そこが不思議でしょうがない。私も会社を経営していますが、リーダーシップという点ではどちらかというところと大宅さんが言われたことにずばり近いんです。自分の配下に言うにしても、どこに君自身があるのかと。全部受け売りじゃないかと。そういう小言を言うことが多いので、その点では全くそうです。



発言する若者

佐々木歳郎（会場） 大学で2年生、3年生を相手にライフデザインの講義をしています。

今までお話のように、日本人のメンタリティは、自分でこれだと選択する風土の中で育ってきていないので、例えばテニスのシャラポアが優勝した時は「私は自分の力を信じていたのでこうなりました」と言うのですが、日本の選手の場合は、礼儀も含めて「みなさん、コーチ、応援していただいた方々のおかげで私はどうやらここにこられました」となる。ただ、今の学生がそれこそ次の時代を背負って立ってもらうためには、私としてはそのメンタリティを良しとしている場合ではなくて、とにかく人生は選択なんだ、きっちり選択するにはどうしたらいいかを一生懸命アジテーションしているわけです。

ビジョンの話になった時、学生に対して、選択するには自分なりの小さくてもいいからビジョンがないとできない。3年後でも5年後でもいいけど、ビジョンを持つことがどれだけ必要かということを散々話しています。

ただやはり、学生は引き出しが少ない

EKUAN: Recently I read the works by Motoori Norinaga (1770-1801). He, in cooperation with Kamono Mabuchi (1697-1769), studied Japanese classic literature and ancient writings and established National Learning in the 18th century. When I read one of his famous poems, "Shikishima no Yamato Gokoro wo Hito Towaba, Asahini Niou Yamazakurabana" (When asked what is your sentiment as a Japanese, I would say that is like mountain cherry blossoms emitting fragrance under the rising sun.), I simply sympathized with him without reason. I wondered why, and found that the essence of Japanese poems from 2000 years ago is "ambiguity." The meaning of a poem is ambiguous, and hard for us to understand logically, yet, we feel sympathetic to it. This sentiment has been carried over to modern Japanese. The essential element in Japanese culture, be it tea ceremony, poems and the like, is aware, sensibility responsive to the nuances

of objects and events in the human and natural worlds. As I seriously consider what it is, I feel like negating it, but on the other hand, I feel aware at times.

* Praising Young People

Toshiro SASAKI (floor): I teach life design to second and third year students at a university. As you have indicated, Japanese have not been raised in a climate that encourages individuals to make decisions themselves. For example, when Maria Sharapova won a championship, she said, "I was confident in my strength, and I won." But Japanese athletes usually say, partially as etiquette, "I have come to win thanks to the support by my coach, family and you all." For my students to be able to shoulder the future of Japan, I agitate them by telling them that "life is a series of choices, you have to learn how to make good choices." In order to

大宅映子さんと2時間 「今、〈ビジョン〉を考える」

ので、いろいろ思っているけど、自信を持っていうことができない。本当はこうじゃないかと思うけど、あまり知識もないし経験もないからと、結局引っ込むんですね。私は極端な言い方をすると、まさに今だからこそ、少なくとも50歳を過ぎた人間は全員とにかくどんなに未熟であっても至らなくても貶すのはやめよう、とりあえずいいところを褒めましょうと。ビジョンを言うにしても、実は今の若い人たちは昔と違って、なにか意見を言いたい。みんなと一緒に譲り合いだけでいけばいいとは思っていない。それなりに自己主張もしたいし、クリエイティブティも表明したい。だけれども、ありとあらゆるところで、例えば親から「お前はまだ世の中にでていないんだから、そんな生意気なこと言うな」。あるいは近所だと「いやいや、君たちはまだ若いね」、会社に入ると役員が「やはり経営のことは一般社員の君たちにはわからないんだよ」と言う。専門家は「何を素人はそんなことを言っている」と言う。とにかく全てが頭を抑えるシステムだらけなわけです。例えば新聞もそうですが、海外だと良いは良い悪いは悪いとちゃんとメリハリがあって主張があるけど、どうも日本の新聞は貶すことばかりやっている。キオスクで売っている、あのろくでもない日刊新聞にしても、あれを散々読んで洗脳されているんじゃないかと思うくらい、とにかく貶しまくっています。ありとあらゆるところでこれだけ貶しておきながら若者は元気がないと

か、ビジョンを持てとか、もうちょっと自分を出せなんてこと自体が僕はおかしいと思う。でも50歳を過ぎたら、もう半分は終わったんだから、ここから先の義務はとにかくひたすら背中を押すのも、抱っこするのでも、突き飛ばすのでもいいけど、とにかく褒めましょうと。僕はそれがすごく言いたいんです。そういう意味でジジババとして、もちろん引き出しを増やすということも含めて、釜爺的に引き出しをいっぱい増やしてやることも必要ですけども、やはり救い上げることがすごく少ない気がします、その辺はどう思いますか？ 私の実感ですけど。

大宅 子育てでは叱るより褒めるが原則のようですけど、それにしてもというのがあるのでね。あるレベルまでいってれば褒める方向に転換できるんですけど、それ以前のお話が多岐にわたるので、どうしても叱る方になってしまうという状況があるんですよ、本当に。

本を読んでいないし、スキー場に行っただってじいさんばあさんばかりですよ。映画館や、劇場に行ってもそうです。いないんだもん、町の中に若い人が。「スキー？ スキーなんて上から下に滑り落ちるに決まっているじゃないですか、なにが面白いんですか」と言われるとね、なに考えてるのこの人たちって、そこで褒めろと言われても私は褒められないよ。弁当男子とか言って「これ僕がつくったお弁当、わーい」なんてハートマークなんかついてるとは倒したくな

ります。うち、こんな男の子がいなくて良かった。いたら私は蹴り出してますからね。そこで褒めるのはちょっと私にはキツいなあ。褒めようと私も思っているんですよ。今日の話でも若い人がこんなことを始めているというのをテーマには入れていたんですけど、そこまでいかなかった。いっぱい面白い人がでてきて、世界に出て行っている。ブータンに一年行っちゃった女性とかいるでしょ。マッキンゼーから。面白いですよ。ケロッとしてできちゃうわけですよ。私たちの考え方とは全然違うし。

森口将之(会場) なぜ日本は明快なビジョンがでないのか。僕は先天的なものや後天的なものや二つあって、農耕民族だとかそういう社会で培ってきた先天的なことのほか、もう一つ、戦争はダメだっというのわかるんですけども、あまりにも戦いそのものをダメというふうに言い過ぎているのではないのでしょうか。

だから先ほど日本の良さ、例えば電車で並ぶとかはいいことなので、相手に説得しなけりゃいけないというのはあるんですけども、説得も戦いだと思うんです。憲法9条で日本は戦争はダメで、それで全ての戦いが悪と見なされる。そういう人がいて、結局それで運動会で手をつないでゴールをしたりする。だから、戦争はダメだけど競争はいいという方向に持って行かないとそろそろ世界と戦えなくなってしまうと思うんです。

大宅 戦いを否定してしまうから、戦略

make a good choice, I tell my students to have a vision in life, even if it is a small and short-term vision.

Students have ideas, but, they are reluctant to express them with confidence. They hesitate to do so because they know they have limited knowledge and experience. So I propose that people over 50 years old praise young people for whatever positive points they have, and never put them down. Young people today want to speak what they think and express their creativity. They don't think to live only by making mutual concessions with others. Nevertheless, they are suppressed by older people, from their parents to neighbors and senior workers at their workplaces who say "you are too young and inexperienced to say such a thing." But I want to say that when you become 50 and older, what you should do from now is to praise young people so that they would be encouraged to be more active.

OYA: Praising seems to be a principle to bring up children. But you cannot always praise children because, to some certain level, there are more cases to scold them, or tell them what to do and what not to do. When they grow to a certain level, we can change our way to praise them.

* Encouraging Competition

Masayuki MORIGUCHI (floor): Considering why we Japanese don't put forward a clear vision, there seem to be two reasons. One is that we have a characteristic as agricultural people, and the second nature through education to renounce fighting. Of course war should be denied, but we should not overly oppose fighting or competing. Otherwise, we cannot compete with other countries.

OYA: Because we deny fighting, we cannot develop strategies. Japan cannot survive only with its manufacturing strength. We

がないんですね。今、ものづくりだけじゃ日本は勝ち残れない。ものはつくるけどあつと言う間に追い越されちゃう。太陽光発電にしる、カーナビにしる。占拠率90何パーセントいったと思うと2年も経たないうちに全部取られちゃう。それは戦略がなく、戦がないから。

森口 こういう話題がテレビなりラジオなりで出ると、すぐに政治家が悪いとか東電が悪いとか言って、一般市民を擁護するような報道が多いですね。

大宅 だから誰も国民自身に耳の痛いことを言わないんです。

森口 「あ、政治家は悪いけど、俺たちは悪くないんだな」と思い込ませるあの報道の姿勢も良くないと思います。

NHKのアンケートの回答で「どちらでもない」というのが一番多いんです。あれだとちょっと日本の未来はヤバいなと。

大宅 意志を持って決断しない。上も決断を全部先延ばしにするから色々ところで負ける。決断できないから。しなくてもどうにかなるのがこの国の不思議なところ。どこかで誰かが決めているんですね。だけど、表立って私が決めましたというのはいないんです。

森口 戦争はダメだけど戦いはいいよっていう方向に。

大宅 競争が嫌と言うなら「切磋琢磨」ならいいでしょ。「切磋琢磨しなければ向上はない」と私はよく言うんです。挑戦をしない。みんなほとんどリスクを取らない。リスク取らないでフルーツだけ

もらおうと言ってもそれは無理なんですよ。

大倉富美雄（会場） クリエイティビティは日本人に既に具わっている。クリエイティビティを意識しなくても表に出るんじゃないか、あまりに気にしない国民性があるのかなという感じを私は持っています。なにも決められなくても生きてしまっている日本人の国民性と体質を、もしうまく宣伝すれば世界のスタンダードモデルになるかもしれない。それはクリエイティビティという前に日本人が持っている体質じゃないかと思う。これはもうとても変えられないと僕は思います。私なんか個人で散々言ったって何も起きやしない。それは大宅さんも、水野さんも、柴久庵さんもそうでしょう。そう思うんです。

ただどこへきて、若い人をみてある種の希望を持つのは、聞いてみればそれなりにすごい意見を持っていることです。ただ、今の日本の産業構造なり社会の仕組みが若い人たちを吸収したかたちになっていないとは思いますが、行政とかあるいは経営者にわかってもらうのに、もう一つ日本に価値がほしい。感性価値に近いんですけど、そういうものがあるんだよという啓蒙の仕事がある、という観点を私は持っています。ご意見をいただけたらと思います。

大宅 若い人は聞けば意見を持っているという。そこですね。こっちからにじり寄って引っ張り出してあげなきゃダメというのは、手間がかかってたいへんで

す。ある程度の歳になったら自分から発信するのも一つの大人の証拠だから、それぐらいのことはやってくれていいんじゃないかな。全部してあげなきゃいけないというのは、ちょっとこちらにとっては荷が重すぎる気が私はするんですけどね。だから教育の場でもう少し自分の意見を述べるとか、英語でできなくていいからとりあえず日本語で自分の意見が言えると。英語はツールですから。でも世界はそれを英語でやることのレベルに達しているので、韓国や中国に遅れをとっているのは事実なんですけどね。

大倉 意見は持っているの、追いつめられれば述べますから、ほっとけばいい。

鳥越けい子（会場） 伺いたいのは「なぜ明快なビジョンがでないのか」がテーマなので、日本デザイン機構としてはどうやってビジョンをだせるシステムをつくるのかとか提言するかではないかと、さっきから思っていましたので、その辺を。

大宅 私はもうビジョンがいらなと思っています。私たち一人一人が持つものであって、誰か一人が、というか政治家が殖産興業だとか追いつき追い越せだとかいうのは違うと私は思っている。



devised solar power generation, car navigation systems, and many others and enjoyed the majority share in the world, but in a few years' time, the position has been replaced by other countries. It is because there is no strategy and fighting among manufacturers. The management of manufacturers do not make decisions with strong determination. They tend to put off making decisions, and in the meantime, competitors in other countries catch up and then surpass Japanese companies. It is a mystery that things will go on somehow without decisions being made in Japan. Of course, someone at some level makes a decision, but nobody openly declares that he has done so. I tell young people to try to build up their capabilities through working hard if they don't like to compete with others. Young people hardly take risks, but want to share the fruit, which is not possible.

* Expression of oneself

Fumio OKURA (floor): Japanese are equipped with creativity. I have a feeling that although we may not be conscious about whether we have creativity or not, it shows itself before we are aware of it. I have some hope in the young people of today. They have their views and express them if they are asked to. But the current social structure is not made to absorb their views. In order to help government officers and business managers understand this fact, I think we need another sense of value in Japan. It is close to the value of sensibility. I think we have to tell young people about this value.

OYA: Young people should express themselves before someone asks them if they have something to say. At the scene of education, they have to be trained to express their views, at least, in Japanese. I won't say they should do it in English, though young people in

Voice of Design トークサロン2
大宅映子さんと2時間 「今、〈ビジョン〉を考える」

鳥越 個人個人が明快なビジョンを出すべきだっていうことですね。

大宅 出すべきというのは、どこかに論文を書く必要はなくて、その人の生活のあるシーンごとに自分で判断して責任を取る行動をするしかないんですよ。

鳥越 だから若者が何を考えているのかわからないのが気になるんですよ。それは分かるんですが、さっきから3.11が非常にいいチャンスだったのに、一年経っても出ないという辺りのところと、その前提になるそれぞれが持つべきだということとの関係はどういうふう

大宅 それはある程度政治家は動かないといけないけどできなかった。

鳥越 それは一人一人がビジョンを持っていないからですか。

大宅 それは時間軸がちょっとね、私が言っていることはもっと長い話であって。

鳥越 もちろん良くわかっているですよ。大宅さんに個人的に詰め寄っている気はまったくなくて、今日のせつかくこういうテーマで集まっているので、この場でもうちょっとそういう方向の議論ができないかっていう提言だけなので、逆に大宅さんにイニシアチブをとってリードして、この場の空気をつくっていただけたら、と思いますが。

大宅 このサロン自体も、そういうものではないと私は思っていて、みんながわーわー言っている間にそれこそ、せつかく来たんだから私は自分の意見を言いたいというふうにわーっといくだらうと

私は思っていたので、促さないと出てこないってのはちょっとイメージが違ったなという感じが私はします。だから引かかる話をした方がいいだろうと私は思っていました。

良きリーダーとは

小張尚孝 (会場) いつも辛口コラムを拝聴しています。少し乱暴な質問ですけれども、今回の原発の対応、首相だとか政府、あるいは民間も含めて、例えば40点だったとします。これが合格点70点にいくためには世界のどこの国のシステムの誰がリーダーだったらもうちょっと合格点になったと大宅さんは考えられますか。

大宅 今の世界中のリーダーは小粒ですよ。それも多分成熟社会の結果だろうと思っていますけど。お答えになるかどうか別としてイタリアの首相マリオ・モンティさん。彼は大学教授で内閣の大臣も選挙も通っていない人です。だから民主主義に乗っかっていないわけです。だけど、彼はギリシャの二の舞にならないというだけの大命題が終わったら政治家はやりませんと言っています。今、国民に対しても緊縮財政で普通の個人でも1割くらい収入が減るのをバッサバッサとやっています。新聞や労働組合は反対していますが、次の選挙を考えないから、辞めるんだからやることだけやる、と。これをどう見るかの話ですよ。ある種独裁ですけどね。

小張 あれもよく国民がついて、ちょっ

と報道は分からないですけども、不思議に思っています。

一番困るのは放射能にしても、解決が非常にほど遠いのに、解決をしていかなきゃいけない。世界のどこのシステムをもってくるにしてもやっていかなきゃいけないことだと思うので、敢えて非現実的な話かと思ったんですけど質問させていただきました。

大宅 やはり、悪平等というか、みんなを説得しないとダメと思っている風土だから、いろんな乱暴なことが日本はできないという状況だと思います。一人でも反対したらダメみたいな話がありましたでしょ。8割がオッケーならいいだろうと私は思います。たかだか100年だから、放射線。かといって止めたからといって縁が切れるわけではないですよ。

そんなものを入れたのが間違いだったんですけど、今更もう入れてしまったものはしょうがないという感じなんですよ。全部やめて全部とめますといってもそれで終わりじゃない。

小林治人 (会場) 今のお話をずっと伺って、人間社会と環境、特に日本の国土68%が山林で、その半分が人工林です。国土緑化で杉の木を植えたらその花粉



other countries of the world have reached the level of expressing themselves in English, and we are left behind Korea and China in this aspect.

OKURA: They have their views and express them when they are put into a corner. So, we can leave them.

*** Prominent leader**

Naotaka KOBARI (floor): I would like to ask you a little outrageous question. Suppose the measures taken after the nuclear power plant accident in Fukushima marked at 40, who do you think could be able to upgrade them to the pass point at 70?

OYA: Well, current leaders in the world do not seem to be powerful. Perhaps it is because we are living in a mature society. I would name Prime Minister Mario Monti of Italy. He is a university professor and has not been selected through an election, and has

not served as a cabinet minister before. He accepted the appointment as prime minister with the preconditions that he would resign as soon as the immediate fiscal issue to avoid becoming a second Greece would be settled. He pressed ahead with budget austerity, affecting the general public to have their income reduced by 10 percent. The press and trade unions are opposing his policy, but he would do whatever is necessary at this critical time. He can do it because he is not concerned about his election.

KOBARI: The solution of radioactive pollution is a time consuming issue, but we must solve this problem by all means mobilizing viable measures from all over the world. So, I dared to ask you this question.

OYA: As we consider that we should make everybody agree, political leaders cannot take rough measures. I would personally

症。これは原発ともある意味通ずるところがあると思うんです。花粉症はすごい勢いでみなさんを蝕んでいます、その原因は単純林で、そして濃い密度で植栽したので林床に日が当たらないためにいろいろな草花が咲かなかつたりする。もともと大地には何億年かのムッターボーデンというドイツ語の母なる土は文化財だという考え方がありますが、シードバンクでたくさんの種が眠っているわけですね。結局、今、森の生い立ちとか森の仕組みをもっと検討すべきで、例えばドイツのシュバルツバルトという黒い森は全部ドイツトウヒで、結局酸性雨に弱くて、今混交林にするよう、20年くらい前からやっています。日本でも林業では努力をしているようです。人間社会の仕組みを見ていても非常に多様な人たちの、だからエリア、スポットごとにみんな環境が異なるわけで、だけど一人でも多くの人がいいなと共鳴するようなくみの必要がある。中国やヨーロッパやアメリカに行って感じるのは、やはり日本は民主主義がいわゆる森に例えれば安定な極相林のような状態を呈しているんじゃないかなと。そのなかで巨大企業というのはある全体の森の構成のなかから図抜けて出たものは、やはり時期が来ると台風やなにかの時にちゃんと自分を守れずに倒れてしまう。一つの遷移のなかでもう少しエコという視点で見えていくことはあっていいかなということ一言。質問ではなく、私が考えていることを申し上げました。

直江由紀子(会場) 女性の仕事というか女子の力というところで、何か物事を進めていく時に、解決をしていこうというふうに女性は考えていくと思うんです。否定だけで終わってしまうと何も解決しない。否定だけだとクリエイティブは生まれなとか。では、先に進むために何を考えなきゃいけないか、この場合をどうしたらなにかちょっとでも新しい兆しを感じるものにできないかというのが、ずっとこれまで私も仕事などをしていなかでそれは非常に女性の力かなと。会議なりいろんな仕事を進めていくうえでそういう動きができるのが女性の力かと考えていることが多いです。

例えば先ほどの杉の問題や、放射能の問題であるとか、こうなってしまうたら仕方ないと。では、このあとこれをどうすればいいかといった時に例えばチェルノブイリは、立ち入り禁止エリアになってからは逆に森林が非常に生物多様性豊かになっている現実があるとか、例えば放射線は微弱だとすごくいいものをもっているとか、それは広島原爆の時にもそういうお話でもしていたと思いますが、こういうことを経験したからこそ、日本はなにを世界に打ち出したらいいののかという一歩が堂々と踏み出せるのかなという気はずっとしています。

テレビや新聞をみたり色々なことを聞いていると気持ちがどんどん萎えていくというか、八方塞がりだなと、私も学校で教えていますけれども、学生に実際どういうふうに行ったらいいいのかと悩む時



がすごく多いんですが、やはり前に進んでいかなきゃいけない。みんなすごくいろいろ考えているとは思いますが、やはり前に踏み出すための後押しなり力なり、そういうものを提案していかなきゃいけないと日々考えておりますし、やはり大人はそういうものをなにか見せる努力を日々していかなきゃいけないと思います。

大宅さんはいつもテレビで戦われている感じがするんですけども、やはりそういうなかで男性と戦われていると思うので、表現方法というのがすごくあると思います。なにかこういうタイミングになったからこそ女のらしさというか、なにか違う側面を見せつつ活躍していただきたいな、という気持ちを抱いたりいたしました。

大宅 私は男と戦うつもりは全くありません。二種類しかいないのになにも戦うことはなくて、特に日本の男性はお気の毒だと私は思っております。散々働いたのに粗大ゴミだの産業廃棄物だのと言われて「粗大ゴミ毎朝出すのに夜戻る」という川柳があるくらいです。女にしかわからないのは生理と妊娠と出産とありますので、最初に言ったのは女と男と

think it is alright to go ahead when 80 percent of people agree to, but they cannot do anything when there is a strong opposition from a small portion of people. We would not be able to break out with radioactive substances for centuries even if we stopped all nuclear reactors now. It was a mistake to have introduced nuclear power generation at all, but we cannot do anything now because they are there. Stopping their operation will not mean a solution.

* Women's way of thinking

Yukiko NAOE (floor): I think that women are oriented to solving problems practically. We think that nothing will be solved or that no creative ideas come out if we see things negatively. We try to find ways to go ahead and find clues for solutions. Women have such practical attitudes in carrying on a meeting or a job. I am teaching at a school, and I often find what to tell my students

when we are depressed watching TV news and reading newspapers filled with accidents and problems. Students may have various views, but I think I should give them encouragement to take steps forward. We grown-ups at least must make efforts to show them our support. When I watch you on TV, you look to be fighting against men. I wonder if you may take a different approach and show us other sides of yourself.

Dialogue or communication with people who have different views is important for us to develop visions, and I think women's soft communication style will act to connect people with different views.

OYA: I don't intend to fight against men. As I said at the beginning, I am always speaking as an individual and not a representative of any organization. Women are not always soft and kind. Women are often more critical and strict than men.

Voice of Design トークサロン2
大宅映子さんと2時間 「今、〈ビジョン〉を考える」

いうよりも組織人か個人かということの差の方が大きく、組織ではなくて個人としてもものをいう立場を私はとっているの

直江 やはり対話、コミュニケーションをしていかないと、うちなるビジョンも育っていかない。そういうときに女の人の柔らかいコミュニケーションの仕方は、そういうものをうまくつなげていく。
大宅 いや、私、女の方がキツいと思うよ。女が牛耳る社会になったらものすごいよ。窓際なんか絶対置いておかないし、あなた働いてないでしょクビって、平気で女の人の人が言うとは私思っていますけど、違いますか？ 女が優しいというのは男の幻想です。

直江 という幻想に乗っているっていうことはありませんか。

大宅 それを使う手はありますけどね。女の敵は女です。

実体へ

栄久庵 「もの言わぬは腹ふくるわざなり」と昔から言われていて、当たり前のことのようですけど、日本語ができてからうまいことを考えたものだなと。今日はそういう点でいうなれば大宅さんにチャンスをつくっていただいたので、ほんとうに感謝申し上げます。やはり人間は黙るとダメですね。しゃべるのは、大自然に向けて声をあげて叫ぶとか、そういうことによって健康維持にいいんじゃないか。こういう会は、本当はビジョンの話に絞られるべきでしょうけど、しか

しものを言うことによって、精神的健康が維持されることは、非常にいいことだと思っています。

最後に一言、今日のテーマがビジョンだったものですから、考えていることを一つ述べてみたいと思うんです。私は日本国を稚内から石垣島まで無数の都市が、山もありますけど、それがこんな小さな国で美しくならないものかなと。「日本のまちを美しくする12章」、敢えて12章と言ったのはたまたま伊藤整に『女性に関する十二章』という著作がありまして、それを使わせていただいたんですけど。そういう12章を私も考えているんですけど、今日のお話を伺って、非常に幅が広くて、大宅さんに言われたことを分析すると、大半が入ってしまうんじゃないかなと思うんで、それは細かく言えば日本のまちを美しくするというは抜本的な問題ですから、非常に難しいことは確かなんですけど、細かくきりが無い。それを大きく捉えて12くらいにまとめれば、そしたら美しい日本のまちがでてくる。我々の環境ですから、観光日本といっても今の日本じゃ観光日本という感じがしないわけです。ですから観光立国と口では言っていますが、本当に稚内から石垣島まで美しい町があるか。

先日、京都のまちを描いた東山魁夷の絵を観ました。写真を撮れば平らな陸屋根が点在している京都です。陸屋根に重ねて、頭がこう三角になるように切り妻ふうに屋根を全部描き換えたんですね。そしたらえらい見事な絵になっていま

て、ああ日本のまちはもともとこうだったのか、かつて事実あったのだと。だけど今は、私自身が思うに戦後60数年の間に、その結果が東京の町の醜さになったのではないかなと。

人の心がまさに具体的に表れているので、それを観ながらうちの建築関係の連中に「仕事は無限にあるよ」といって冷やかしているんです。そういう意味で、日本を美しくすることは一つ大きなテーマじゃないだろうか。またここにご在席の方はほとんどそれに関係されている方が多いと思いますし、大宅さんのお話をお伺いしても十分に適している、適していると言ったら失礼な表現ですけど、引き出せるんじゃないかなと。要するに、漠然とビジョンというとなかなか出にくいんですけど、「まち」とか「住んでいるところ」となれば非常にプラクティカルなもので。日本国は小さいまちですけど、小さなまちになればなるほど美しい国でありたいなと思っています。

佐野 ありがとうございます。今後のサロンでは、活発な議論が展開することを期待します。それでは、今日はこれで終了します。(文中、敬称略)

大宅映子 (おおよえいこ)

1941年東京生まれ。国際基督教大学卒業。PR会社勤務。1978年から始めたマスコミ活動では、国際問題・国内政治経済から食文化・子育てまで守備範囲広く活躍し、大所高所からの視野と同時に個人の立場で発言する切れ味のよいコメントが好評である。これまで行政改革委員会、税制調査会、道路公団関係四公団民営化推進委員会など多くの委員を歴任。日本の構造改革に関わってきている。とくに2002年、6月からつとめた「道路関係四公団民営化推進委員会」では最後まで監視の役を全う。近刊に「女の才覚-日本の女性が失くしてしまったもの-」(ワニブックスPLUS新書 2011年)など、著書多数。

* My vision "Make Japan Beautiful"

EKUAN: Since the subject of this Talk Show is "vision," I would like to share what I am thinking now with you. I wonder whether it is possible to make all cities more beautiful from the northern end to the southern end of the Japanese archipelago, hence, "12 Chapters to Make Japanese Cities Beautiful." Japan attempts to be a tourism-oriented country, but the current status of cities can hardly be considered to be touristic to satisfy visitors.

I saw a painting of Kyoto by Higashiyama Kai-i. If photographed, there are flat-roofed buildings here and there in Kyoto now. But in Higashiyama's painting, houses have gable roofs. As a result, Kyoto in his painting is beautiful, and it amazes me to think that the cities of Japan used to be as beautiful as this painting. In the past 60 years after WWII, Kyoto and other cities have become as ugly as Tokyo.

To make Japan beautiful could become a great theme. The grand vision may be difficult to envisage, but if we limit our mind to a "town" or a "place to live in" we may conceive a vision easily.

特集2 Voice of Designトークサロン3 シリーズ：「今」の共有

向井周太郎さんと2時間

「今、デザインの原点から再考する」

日本に真の意味のデザインは定着したか

期日 2012年7月13日（金）

主催 日本デザイン機構

会場 津田ホール

開会挨拶

水野誠一 JD理事長 IMA代表取締役

日本デザイン機構は、デザインを様々な視点から考えていく活動をしています。向井先生には我々のメンバーとして、いろいろご指導をいただいています。今、デザインという言葉が氾濫し、デザインが空気のように我々が毎日接する概念になっています。しかしそういう時代だからこそ、氾濫するデザインの中で、日本に真の意味のデザインが定着したかということ問い直す意味は非常に大きなものがあると考えています。

日本デザイン機構の活動は、狭義のデザインということではなく、広い意味で社会を変えていく、社会を変革していくことも含めたデザインをいつも問いかけてきました。さらにいえば真の意味のデザインというのは何なのかを絶えず問い直していくことが、今この21世紀の日本にとっては非常に重要なことではないかと思っています。

とりわけ、今日本が元気さや活力を失いつつある時代、また若い人たちがものから離れ始めている時代。その責任の一

端もデザインというものの考え方に、もしかするとあるかもしれない。私は絶えずそんなことを自問自答していますが、そういう意味でも今日お話しいただく向井先生のご見識が、我々の眼を覚まさせてくれるのではないかと期待しております。

主旨説明

佐野邦雄 JD監事 インダストリアルデザイナー

このトークサロンは「今の共有」という共通テーマでやってきています。三回目の今日はインダストリアルデザイナーで武蔵野美術大学名誉教授の向井周太郎先生をお迎えしました。向井先生には「今、デザインの原点から再考する－日本に真の意味のデザインは定着したか」というテーマでお話をいただき皆さまとの討議を通して「今の共有」をしたいと思います。最近のデザインは、現象を分析して上手に回答につなげていくというのが風潮なのですが、ややもすると表面的になりがちです。今回のトークサロンではあえてこのような非常に重いテーマ

をお願いしました。

考えてみますと戦後日本のデザインは物資欠乏から始まって、社会とともに進展し、成熟はしたけれどもなんか留まっているなど、滞留感に浸っているような気がします。そこを自ら自立的に打ち破る方法がなかなか見いだせないでいるという、そういう状況じゃないかと思えます。そのためにはこの状況を客観化する視座が必要なのではないか、と思います。今までは視座と言うと前だけを見ていましたが、全方位を見られる視座が今必要ではないか、と思います。

日本には、国際的にデザインの源流といわれる国からいくつかの流れが流れ込んできました。その流れを受ける滝壺みたいな状況で発展してきました。しかもその流れのなかのかたちとして見えるもののみに関心が集中して、その背景とかしくみとか、もっと言えば精神、そういうものに対して余り関心を示してこなかったという反省があると思います。

今、日本が確かなデザインの源流の一つになるためには、その背景としての哲学を含めた思想の基盤、そして、しくみというものが重要だと思います。今回は、

Special Issue 2 Talk Salon 3 with Shutaro MUKAI Rethinking Design - Has Design Taken Root in Japan in its True Meaning?

Opening speech : Seiichi MIZUNO, JD president, president of IMA
The term Design is widely used with different definitions. It may be significant to review whether design in its true meaning has taken root in Japan.

Through its activities, the Japan Institute of Design has sought to use the term in a broad sense to include social change or social reform. It is important for us to continue to define design in its real sense in the current context.

Introduction : Kunio SANO, JD auditor, industrial designer
Postwar design in Japan has developed through incorporating

various design trends from outside. Now it seems that design has reached its maturity, and is stagnant. In order to find a way out of this situation, we need a yardstick by which to assess the current design situation objectively.

We have accepted design trends from countries which are said to be the headstreams of design. But while we have poured our attention and efforts into assimilating their stylings and appearances into our own design culture, we have neglected the background, the mechanism and spirit behind them.

If we are to become a source of design, we need to establish our ideological or philosophical foundation and a design mechanism. Today, Mr. Mukai will discuss 1) The Meaning of Modern Design – Rethinking its Tasks, 2) The Current situation of Design in Japan – Has the true meaning of design taken root in Japan?, and 3) Life and Design.

向井さんの何冊かの著書の中から私どもが勝手に項目を抽出させていただいて、流れを三つのフェーズについてお話しいただくことにしました。

一番目が「近代デザインの真の意味とは—その課題の再考」。二番目が「日本のデザインの状況—デザインの真の意味は定着したか」。三番目は「生の全体性としての生活世界の形成とデザイン」。この三つのフェーズでお話をいただき皆さまと討議をしたいと考えています。

第1フェーズ 講演

近代デザインの真の意味とは—その課題の再考

向井周太郎 今、お話にありましたように、三つのテーマのうちの一つは当初「バウハウス、伝わっていない背景」ということでしたけれども、バウハウスだけを話しますと、これだけで2時間でも3時間でも話してしまいますので、今回は、それを少し読み替えて、その時代的な背景をつくってきたデザイン運動としてのドイツ工作連盟と、その運動が100年も続いているという、そのことに触れたいと思っています。バウハウスについては、ほんの一言お話しするくらいになります。では、最初に「近代デザインの真の意味とは—その課題の再考」ということでお話しさせていただきます。

「モデルネ」と呼ばれる近代のプロジェクト

私と近代デザインとの出会いは、「モデルネ」と呼ばれる近代プロジェクトとしての社会改革的なデザイン運動に対する開眼でした。その観点に立つと、デザインは社会の希望を照らし出していく生成装置なのです。近代デザインをそういうプロジェクトとして体験したところに始まります。

その「モデルネ」と呼ばれる近代のプロジェクト、すなわちデザインのモデルネについて、近代化と近代性の相違について、社会改革の手法としてのデザインやそれを推進したドイツ工作連盟（ヴェルクブント）や、それとバウハウス（Fig.1）のデザイン運動の真の意味、その内発的な発展としての近代化などについて触れさせていただきます。

ドイツの社会学者のユルゲン・ハーバーマスの『近代 ^{モデルネ} 未完のプロジェクト』（三島憲一編訳、岩波現代文庫）の中で、当時のポストモダン論の潮流を念頭にモデルネと呼ばれる近代のプロジェ



Fig.1 デッサウ市立バウハウス校舎
設計 W. グロピウス, 1925-26
Bauhaus School House, Dessau,
designed by W. Gropius

クトというのは終わっていない、と述べています。

モデルネとは、近代化に対する、いまひとつの対抗的な近代のプロジェクトであり、近代市民社会における生活世界のあるべき「近代性」を形成することなのです。近代化というのは、いわゆる近代産業革命以降の技術、産業、資本主義経済による発展過程を指す概念なわけですが、モデルネというプロジェクトは、その「近代化」の在り方を社会的・文化的観点から絶えず問い直し、あるべき生活世界へと豊かに再編していくための、「近代化」に対するいまひとつの対抗的な近代のプロジェクトでした。

そして、ドイツ工作連盟やバウハウスは、そのような意味での近代のプロジェクトであり、強い革新性と批判の精神をもって、時代の課題に挑戦してきたと言えます。

社会改革の手法としてのデザイン

そして、「社会改革の手法としてのデザイン」ということの意味ですが、それはロシア革命のようないわゆる政治的な革命による社会改革ではなくて、デザインという行為そのものが実は社会改革の手法であるという認識です。ロシアの政治革命とリンクした芸術運動と非常に違う点だと思います。

北欧や中央ヨーロッパ（中欧）諸国では、デザインという行為を社会改革の手法とするデザイン思想が共有されてきました。

Phase I. Meaning of Modern Design—Rethinking its Tasks

Shuntaro MUKAI, industrial designer

* Modern Project called “Moderné”

I came across modern design when I was enlightened by a design movement called “Moderné” which included the intent of social reform. It was a project that design was a kind of a mechanism to shed light on hopes in society.

Opposing modernization, “Moderné” was another modern project meant to form “modernity” in modern civil society. Modernization is a process of technical, industrial and capitalistic economic development occurring after the so-called modern Industrial Revolution, while the underlying principle of the movement, “Moderné” as an antithesis, is to ceaselessly review from social and

cultural viewpoints the process of development based on techniques, industry and a capitalist economy, in order to restructure society into a more desirable form of society for people to live in. The Deutscher Werkbund and Bauhaus (Fig.1) are components of the “Moderné” movements which addressed contemporary problems with strong innovative and critical minds.

* Design as a method of social reform

Design as a method of social reform implies that the act of designing itself is a method of social reform, not a political revolution. Artists and craftsmen in Northern and Central Europe shared the concept that the act of designing was a method of social reform. The series of design movements that were spawned by the Arts and Crafts Movement established by William Morris (1834-1896) in Great Britain, inspired by John Ruskin's writings,

それはどういうことかと言うと、イギリスのラスキンやモリスのアーツ&クラフツ運動をドイツに中継したダルムシュタットの芸術村運動（1899）からドイツ工作連盟（1907）、そしてバウハウス（1919）というデザイン運動の精神を北欧や中欧も共有しているからです。ことに、ドイツ工作連盟の欧州全域への波及の意味はたいへん大きいです。

ドイツ工作連盟（ヴェルクブント）やバウハウス運動の真の意味

ドイツ工作連盟の特色は、単に芸術や建築の運動ではなくて、政治家や企業家など各領域の最高の知恵を結集した一つの社会的な新しい型の社会横断的な、それを統合していく全的な運動でした。この運動は、日本では一般的にプロダクトの良質化運動といわれていますけれども、プロダクトだけではなくてプロダクトから住環境におよぶ質の向上を目的としたものです。その「質」は、材料や技術や機能の面での質だけでなく、美的・形式的な面での質だけでなく、社会的、文化的な面での質も含めた全的な質の形成を目的としました。

質の形成は、さらに、ハーバーマスのいう公共性の問題とも連関する社会的コミュニケーションの問題も含んでいました。あるべき近代市民社会のあり方を考えた時、絶えず情報公開していくことが重要なことであって、それを担ったのがグラフィックやタイポグラフィ、後にビジュアルコミュニケーションという概念

で捉え直されていくコミュニケーションやメディアの機能とその質の形成の問題です。こうした啓蒙運動のためのコミュニケーション活動も近代デザインの重要な役割の一つでした（fig.2, 3）。

このドイツ工作連盟の影響はほぼ欧州全域に波及いたしました。1912年にはオーストリアに工作連盟ができます。翌年にはスイスに工作連盟が設立される。1914年には、1845年に設立されたスウェーデン工芸協会（SSF）がドイツ工作連盟の方向へと再編され、1915年には、イギリスに工作連盟をモデルとしたデザイン・産業協会（Design and Industries



Fig.2 ドイツ工作連盟の「商品情報-索引カード」
左：イェナガラスのティーセット、デザイン ハインツ・レップフェルハルト、1955-56年
右：ブラウン社のオーディオ・シリーズPK-G1、デザイン ハンス・グュジョロ（ウルム造形大学の最初の委託プロジェクト）1955年
Product Information-Index Cards of the Deutscher Werkbund
left: Tea set by Jenaer Glas, designed by Heinrich Luffelhardt 1955-56
right: Audio set series PK-G1 by Braun designed by Hans Gugelot (first project commissioned to Ulm School of Design), 1955

Association/DIA) が設立されました。さらには北欧から中欧の諸国においても、工作連盟の精神を継承した運動体が形成されて、デザインによる近代性の形成が進められました。

つまり、イギリスのラスキンやモリスの運動、その近代デザインの思想が、ドイツのダルムシュタット芸術村運動を通してドイツへと中継されて、そしてドイツ工作連盟が設立される。それがまたイギリスへと波及して、一種のお里帰りのようなことが起こります。さらに、北欧からセントラルヨーロッパ諸国においても、この工作連盟の精神を継承した運動



Fig.3 ドイツ工作連盟月刊誌【DIE FORM】
左上：1922年1号、右上：1925年1号
左下：1928年7号、右下：1934 / 35年7号
Die Form, monthly magazine of the Deutscher Werkbund
Upper left: No. 1, 1922 issue Upper right: No. 1, 1925 issue
Lower left: No. 7, 1928 issue Lower right: No. 7, 1934-35 issue

which was conveyed to the Artists' Colony Movement (1899) in Darmstadt, Deutscher Werkbund (1907) and Bauhaus (1919), and countries in Northern and Central Europe share the spirits of these movements.

* True meaning of the Deutscher Werkbund and Bauhaus

The Deutscher Werkbund was not merely a movement of art and architecture but was a new holistic social movement that involved politicians and business people as well. The movement aimed at enhancing the quality of society in general from products to living environments. The concept of "quality" covered not only raw materials, techniques and functions, and aesthetic and formative beauty, but also social and cultural aspects. Further, it considered the issue of communication to be a concern. People in the Werkbund emphasized the need for information disclosure, thus,

graphic design and typography were developed leading to the concept of visual communication. The philosophy and activities of the organization were released to the public (Fig.2 and 3).

The impact of the Deutscher Werkbund extended to the whole of Europe. Organizations to promote the spirit of the movement were established one after another, in Austria in 1912, Switzerland in 1913, Sweden 1914, Great Britain in 1915, followed by other countries in Northern and Central Europe. These organizations tried to reorganize their societies under the spirit of "Moderné" through design.

A notable point in its history was the convention in Köln in 1914, in which Hermann Muthesius, one of the founders of the Werkbund proposed the promotion of standardization. This convention became well known because his view was opposed by Henry van de Velde who advocated aesthetic "individuality." By

体が形成されて、近代化の発展をデザインによって近代性へと再編していく運動が進められていきます。

ドイツ工作連盟もナチスの時代にやはり一時活動を中断しなければなりません。日本のデザイン史で語られているドイツ工作連盟の活動については、大体1914年のケルン総会の話が有名です。それは「規格化」をテーマにした大会でした。工作連盟の設立者の一人であったムテジウスがその運動目標として規格化の推進を主張します。それに対する創造的な芸術的「個性主義」を支持したアンリ・ヴァン・ド・ヴェルドとの意見の対立という出来事としてよく知られています。しかし、この機会が、この運動において「規格化」の推進というプロジェクトに取り組む大きな転換点となっていきます。日本では、この「規格化」というと、訳語の意味作用の問題もあって、今日の生活環境の画一化や均一化の問題の元凶のように理解されることもありますけれども、しかし、「規格化」の原義は「タイプ化」することで、いわゆる「規格化」もその一部に含む質的な評価基準の範例化がその根本の精神なのです。つまり、根本的な質の規範を形成していくことなのです。この工作連盟は第二次大戦後、1947年にはもう再建され、2007年がその活動の100周年で、その歴史の多面的な検証が行われました。

それから、バウハウスについては、今日はほとんど触れることができませんけれども、近代のプロジェクトとして独自

な意味を持つのは、一般的に理解されているように、単に機械産業時代の一つのデザイン様式を生み出したからではないのです。むしろ、そうではなくて重要なのは、総合への意志を根底においた新しい「全的な人間の育成」を目的とした学校教育という一つの社会共同体としての「場」を介した近代のプロジェクトであったからです。

このことにつきましては、川崎市市民ミュージアムで1994年にバウハウス75周年記念の「バウハウス—芸術教育の革命と実験」という展覧会があり、私はその図録に「バウハウス—生の全体性への問い」という論考で、かなり詳しくバウハウスのあり方を書きました。バウハウスという共同体とその運動の特質は現代文明の「生」をどう捉えるかという思想や世界形成の基層を成す問題として今日なお再検討が必要です。

内発的発展としての近代化

ヨーロッパのデザイン運動がほぼ欧州全域で近代のプロジェクトとして共有の精神を継承しているわけですが、先に触れましたように、同時にたいへん重要なことは、それぞれの国や地域のデザインがそれぞれの自然、風土、歴史、文化の中に織りなされて社会に根付き、それぞれの特質を形成しているということです。いいかえれば市民社会としてそれぞれの固有の生活文化と環境が形成されてきているということです。これは「内発的な発展としての近代化」というふうに

呼びうることで、先ほど近代化と近代性の相違を申しましたが、まさにこのことが近代性の形成です。実は日本の近代化はいわゆる内発的ではなく、外発的で、真の近代化ではないと。そういうことをちょうど3.11の100年前、1911年（明治44年）に指摘したのは夏目漱石です。このことにつきましては、第三のテーマの折にお話ししたいと思います。

第1フェーズ 質疑応答

佐野邦雄（司会） どうもありがとうございました。バウハウスとかドイツ工作連盟とか、みなさんもかなりご存知だと思いますが、今まで抱えてきたイメージとちょっと「えっ」というところが私自身もありました。ここでみなさんからご意見をいただきたいと思います。

遠藤平雄（会場） ロシアに誕生した構成主義とドイツ工作連盟を中心としたヨーロッパの文化圏との関係性、例えばバウハウスの教授陣の中にいたカンディンスキーとかロシア構成主義とバウハウスや工作連盟などの関係性とはどういうことだったのでしょうか。それをちょっとお伺いしたいと思うのですが。

向井 もちろんロシア構成主義はバウハウスと同時代です。モスクワにもバウハウスと同じような「ヴフテマス」という新時代の美術研究機関としての学校がで

standardization, he intended to establish fundamental quality standards, not industrial standards or standard modules.

Let me touch upon Bauhaus a little here. It is generally known to have brought about the design styles suitable for the age of machinery and industry. Bauhaus, as a movement, sought a means to reconcile the artist and the machine in the establishment of the school.

* Modernization as spontaneous development

The design movements in Europe have evolved with a common spirit. What is important is that the development and growth of individual movements were based on the nature, climate, history, and culture of their respective countries. In other words, work cultures and living environments in civil societies have developed differently with respect to their individual backgrounds. Therefore,

the movement can be seen as a spontaneous development sparking the modernizing process. I mentioned the difference between modernization and modernity, and the movement meant the formation of modernity. In this sense, the modernization of Japan is not spontaneous modernization.

Q & A Session for Phase I

Hirao ENDO (floor): I would like to know the relations between Constructivism in Russia and the European Cultural Sphere centering on the Deutscher Werkbund. For example, the relations between Wassily Kandinsky who was among the professors at Bauhaus, and Russian Constructivism and Bauhaus and the Deutscher Werkbund.

きました。それも非常に革新的なものです。そしてロシア構成主義は、例えばエル・リツキーを通してドイツの中に、バウハウスをはじめ大きな影響を与えていきます。ヨーロッパの作家たちとの広い交流によって、リツキーの影響はスイスからオランダの「デ・ステイル」や「ダダ」などにも波及しました。

バウハウスにおいても、後期にハンネス・マイヤーが校長になって以降には、ソビエト連邦と、そのロシアのいわゆる革命後の社会改革の問題と深く関わるようなところがありましたけれども、それが問題になって彼は更迭されてしまって、ミース・ファン・デル・ローエが校長になった、という経緯があります。

遠藤 ありがとうございます。もう少し構成主義の話で言えばリツキーとかタトリンというアーティストがもっとバウハウスの中に入ってきてもいいのではないかという感じがしましてね。

向井 構成主義という概念そのものが、全体的な概念です。全体的というのは今で言えばホロン、日本デザイン機構の水野理事長のいうホロデザインに近い面があります。いわゆる「構成」というのは、造形を展開していく時の「構成」という概念や社会を「構成」していくという概念でもあり、さらにさまざまな社会のプロセスを展開していく時の「構造」概念でもあったりします。そういう意味で、ロシア構成主義はセントラルヨーロッパ

の動きとずいぶん重なるところがあると思います。ただし、根底においては、政治経済思想が大きく異なっていたこと。その点がロシア構成主義の展開とドイツを中心としたセントラルヨーロッパの展開との違いになってくるのではないかと私は思っています。

遠藤 ドイツで生まれたエンゲルスやマルクスの思想がありますね。その面からもドイツ文化とロシア文化というのが非常に相互に影響力があつたわけですね。だからもう少し構成主義の人々がドイツの中になだれ込んでもいいんじゃないかな、と漠然とただそういうふう思ったのです。

向井 例えば、ロシアのヴフテマスに関係していたカンディンスキーがバウハウスに招聘されています。バウハウスはセントラルヨーロッパのほぼ中心に位置し、当時の前衛作家たちの相互交流を喚起する活発な一つの拠点になっていたのだと思います。そういう意味ではロシア構成主義ともかなり大きなインタラクションがあつたといえます。

佐野 先ほどドイツ工作連盟は、質的な規範を規定したのだ、というお話がありました。その内容、「質的な」をもう少しちょっとお話を聞きたい。

向井 質というのは、近代の市民社会の中で、例えば住宅で言えば、贅沢ではな

く、真の豊かさとして、いわゆるゆとりのある生活のために最小限必要な住空間の広さと機能の質的基準のことで、まさに市民社会の住まい、あるいは生活の質を象徴するにふさわしい規範のことで、近代は都市も地域も、市民が主権をもつ社会ですね。その中で一般の人たちの住まうべき住居はどうあったらいいのか。ドイツ工作連盟は戦後いち早く住宅問題に取り組み、人間的な生活にふさわしい家族構成ごとの最低の面積基準や設備条件の範例を提示していました(Fig.4)。私がしばらくいたハノーバー市の例ですと、その生活空間を確保するために、住居費が所得の2割を超えてしまう場合には地方自治体はその差額を補填するといった制度設計がなされていました。それが質的な規範の一例です。

伊坂正人 (会場) 最後の方にありました「内発的発展」という言葉ですが、もう少し強く言うと、モリスの運動や後の工作連盟の流れの底流に「市民革命」という概念があつたと言い切っているものかどうか。

向井 そうですね、市民革命、そういう意識の流れはあつたと思います。

伊坂 最初にご紹介のあつたハーバーマスは市民社会を形成していくには、革命とまではいわないまでも、公の権力に対して私の権力ともう一つ概念として公共、パブリックという概念を出していま

MUKAI: A research institute in a new age, Vkhutemas, was established in Moscow which was similar to Bauhaus. It was a very innovative institute. Russian Constructivism exerted great influence on Bauhaus through, for example, El Lissitzky.

ENDO: Talking about Constructivism, artists like Lissitzky and Tetris could have been more involved in Bauhaus.

MUKAI: Kandinsky who was related to Vkhutemas institute in Moscow was working at Bauhaus. In those days, Bauhaus was a design center in Central Europe and had interaction with Russian Constructivism. The concept of Constructivism is a holistic concept. It has common aspects with the movements in Central Europe, the only differences between the two were their political and economic ideologies.

Kunio SANO (floor): You said that the Deutscher Werkbund provided "quality standards." Will you elaborate on "quality"?

MUKAI: Take a house for example. A "quality" house means a house that is not luxurious but is cozy and yet affluent enough to symbolize civil society. What quality is desired of a house changes with the number of people who are living in it? (Fig.4) In Hannover, when a house rent exceeds 20 percent of one's income, the local government gives a subsidy to fill the gap in order to ensure a certain amount of space for a family. These kinds of provisions have been made by the municipal government. This is what is meant by quality standards.

Masato ISAKA (floor): You mentioned "spontaneous development." I wonder if we could see that there was the concept of popular revolution underneath the movements by Morris and Werkbund. Jürgen Habermas put forward the concept of public as an element to form civil society as a third power to ruling power and private power. I see this to be a kind of political movement to give some

すね。これなども、ある種の市民というものを浮上させていくポリティカルな動きだと思うのですが、そういうものを包含した運動として見て行ってよろしいのでしょうか。

向井 そうだと思いますね。ただ、内発的發展というのは、民族や地域固有の自然、風土、歴史、文化に根ざし、その内側から生成されていく発展の仕方です。外側から与えられ、大きく変わっていくというのではなく、社会形成が自律性を持っている、自分たちはこういう神話を持っている、自分たちはこういう文化を持っている、自分たちはこういう歴史を持っている、技術や産業もそうですけれども、そういう内的固有性から、それぞれの市民社会にふさわしい姿をつくり上げていくことを意味しています。日本の近代はそういう固有の富の多くを全部捨ててきた、そういうかけがえのないものを近代化の名のもとで失ってしまった。

例えば、ウルム造形大学の共同創設者で、初代の学長になったマックス・ビルは、1940年代にデザインの目的は環境形成である、それはコミュニケーションの問題であれ、プロダクトであれ、建築や都市計画であれ、それらすべての対象は環境形成であるという問題提起をしました (Fig.5、6、7)。このことも、内発的發展にもとづくデザイン概念の再定義・再構築でした。これは、各領域のデザイン統合体を「建築」に見た、バウハウスの創設者ヴァルター・グロピウスの「総



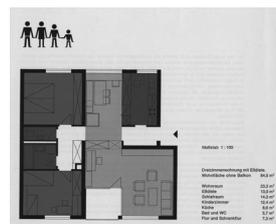
Fig.4 「Ihre Wohnung」の表紙と家族構成と居住空間の必要性（最低必要面積・設備例）p20~31より／「Ihre Wohnung」。西ドイツの戦後の住宅政策の一端を示す資料、各都市のドイツ工作連盟「住まいの相談所」が配布していた住宅ガイドライン集「あなたの住居－住み心地よく、よく考えられた設備の整った、暮らしにふさわしい住まい」ドイツ連邦共和国住宅制度・都市計画大臣・L. ラオリツェン博士 推進・監修、1968年版 (A5変型76ページ)。
Cover of Ihre Wohnung and the proposed minimum footages and equipment for houses according to family sizes, pp. 20-31. "Your House - Comfortable to live in with well-thought equipment suitable to your lifestyle. 1968 edition" a booklet of house guidelines distributed at the House Consultation Center organized by the Deutscher Werkbund. It was supervised and promoted by the Minister of Housing System and Urban Planning (Dr. L. Lauritzen), West Germany (A5 76 pages). It shows a part of the housing policies in postwar West Germany.



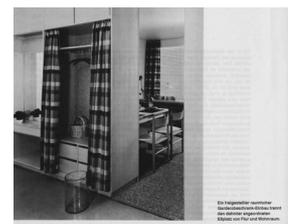
独身者用ワンルーム住居：バルコニーを除く居住面積37.7㎡／ワンルーム備え付けベッド空間例
Studio apartment for a single person: 37.7 sq.m. floor area + balcony with a bed



夫婦と幼児3人家族用住居：バルコニーを除く居住面積57.5㎡
Apartment for a couple and a small child: 57.5 sq.m. floor area + balcony



夫婦と子供2人家族用住居：バルコニーを除く居住面積84.5㎡／作り付け収納家具で仕切られた食卓空間例
Apartment for a couple and two children: 84.5 sq. m. floor area + balcony Dining room walled with a built-in storage unit



夫婦と子供4人家族用、地下を用いた2階建住居：庭と地階貯蔵室を除く居住面積131㎡
Two-story house for a couple and four children using underground: 131 sq. m. floor area + basement storage and garden



light to citizens. Can I consider "spontaneous development" to be a movement that includes popular revolution and the concept of public?

MUKAI: Certainly. However, "spontaneous development" implies a way of development that a society changes not by force or impact from other countries but from within the society based on its nature, climate, history and culture. It is important that people consider their society to be autonomous, and that they have their own mythology, culture and history to build a desirable society as a civil society. Modernization in Japan has progressed while leaving these things behind, and people have lost these things in the process of modernization.

Phase II. Current situation of Design in Japan –Has the true meaning of design taken root in Japan?

MUKAI: I do not think that the true meaning of design has taken root in Japan. Moreover, I feel that Japanese people have little understanding that sovereign power resides with the people, and it is upon this concept that modern civil society is built and social consciousness exists. This understanding is the precondition to understanding the true meaning of design.

I published a book titled "Beginning of Design" in 1978, in which I wrote:

"In present-day Japan, design has become popularized even within the entertainment and amusement business. However, the true meaning of design seems to have not taken root on either the design provider or design user sides. I suspect that the economy

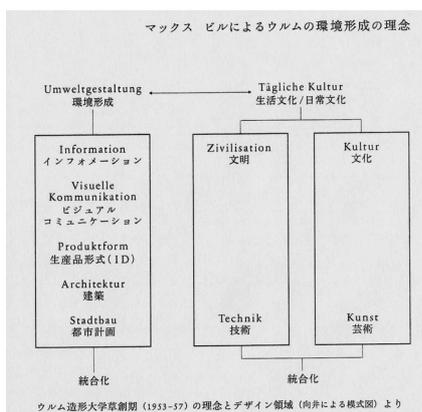


Fig.5 マックス・ビルによるウルムの環境形成の理念
Concept of environmental creation (Umweltgestaltung) at Ulm School of Design by Max Bill

合」の理念の継承・発展です。

他方、同時代には北欧のデザイン運動を推進したスウェーデン工芸協会のグレゴール・パウルソンは、やはりデザインの社会的な機能をかなり重要視して象徴環境という概念を出してくる。この「象徴環境」とは、先にも「質的規範」として述べた市民社会の新しい暮らし方の質を象徴するような環境の形成を意味しています。自然、歴史、文化に根ざした内発的なスウェーデンらしさなど、アイデンティティとも繋がる問題です。北欧諸国の1950年代の家具やプロダクトがこうした地域社会の中で生まれ、しかもそれらがロングライフで、今日も世界中で愛されているという普遍性の理由も、こうした観点からよく分かるのではないのでしょうか。



Fig.6 1949年にスイス工作連盟のプロジェクトとしてマックス・ビルが世界から選定・組織した「良いフォルム」展の一部。その選定デザインを基礎に52年に刊行されたビルの著作「フォルム (FORM)」のデザイン事例と論考が20世紀中葉における「良質デザイン」の範例となり、ウルム造形大学でも、それをガイドラインとした。
A part of the "Good Form" exhibition organized by the Swiss Werkbund in 1949. For this project, Max Bill selected the exhibits from the world. Bill published Form in 1952 based on the selected designs for the exhibition. The design samples and discussion in the book became textbook examples of good designs in the middle of the 20th century, and Ulm School of Design used them as its guidelines.



Fig.7 マックス・ビル著「フォルム (FORM)」1952年、表紙と作品ページ (『世界デザイン史』美術出版社より)
Cover and the page showing the work, Form, by Max Bill, 1952

第2フェーズ 講演

日本のデザインの状況 — デザインの真の意味は定着したか

デザインの真の意味は定着したか

向井 日本ではデザインの真の意味ばかりか、その前提としての主権在民の近代

市民社会や「社会性」という概念の認識というのが希薄な感じがしています。

私の1978年に書いた『デザインの原点』の中の次の言葉を佐野先生が抜粋してくださっています。「日本の現代デザインの現象は、風俗にまで及んで大衆化していると言わねばならないが、作る側にも、かつまた使う側としての生活者の中にも「デザイン」に対する真の意味は定着しなかったのかもしれない。本来「手段」であるべき経済が、いつしか目的化され、「デザイン」もまた「経済の目標へと向けた手段」と化していないか。そうした状況の中で、日本文化の中にあつた精神的理想と生活方式との合致した質の意識や美意識もいづこかへ喪失してしまっているのではないか。」

佐野先生が抜粋してくださったもう一つは『生とデザイン』の中に収録されている、1996年に書いた「職業としてのデザイン」の中の言葉です。「近代デザインのなかで、とりわけ20世紀において、インダストリアルデザインは、私たちの生活世界にもっとも広く影響を与えるきわめて重要な現象であったといえます。しかし、それにもかかわらずそのデザインがとくに日本では企業体の中であまりにも効率よく細分化されて、高度大衆消費社会の促進には役立ったのかも知れませんが、デザインを社会的なものとして捉える哲学的視点を欠落させたまま、生活の真の豊かさの創造という課題からはあまりに遠く隔たつて発展をとげてしまっています。」

which basically should be a "means" for living has become an "objective" in itself and design has also become a "means to achieve economic goals." In such a situation, the sense of value or aesthetic value which was included in the traditional spiritual ideals and lifestyle within Japanese culture has been lost."

* Designer as a profession

I wrote another essay on "Designer as a profession" contained in Life and Design published in 1996, in which I commented:

"In modern design, particularly in the 20th century, industrial design exerted widely reaching influence in people's living. However, in Japan, industrial design has been segmented for the sake of efficiency in corporate organizations. It may have helped the development of mass consumption, but a viewpoint to understand design as a social element was lacking. As a result, it

developed afar from its real purpose of creating true richness in life."

When I see design works around from the viewpoint of expressing the professionalism and "calling" of a designer, I see that an understanding of design as a social element is lacking. I am afraid that designers have not been trained to be conscious about design as a social element. Also, I feel designers lack a quest for, and recognition of modernity or desired richness in life.

* Lack of quest for "Philosophical point of view to understand design as a social element"

Finally, I feel that the philosophy of ensuring human dignity and safety in life as the base for life and the institutional design of the philosophy are lacking in Japan. As a precondition for these to be satisfied, the true meaning of design should be established.

Voice of Design トークサロン3 向井周太郎さんと2時間「今、デザインの原点から再考する」

しかしこの場合の哲学的な視点というのは必ずしも哲学的といわなくても、デザインを「社会的なもの」として捉える視点というだけでも充分だと思います。

職業としてのデザイン

時代の転換期、1919年にマックス・ウェーバーが「職業としての学問」という青年たちに呼びかけた講演をして本にしました。それを念頭に置きながら、私も若い人たちに「職業としてのデザイン」というタイトルでデザインについての呼びかけをしました。

この場合の「職業」という概念は、ドイツ語でのベルーフ、英語でのプロフェッションの意味なのですが、これは本来、天職とか使命という意味を持っています。マックス・ウェーバーももちろんそういう意味でこの概念を使ったわけです。そういう観点で「職業としてのデザイン」を見る時に、日本ではデザインを社会的なものとして捉える視点が、社会性が欠如しているのではないかと。あるいは、意識化されていないのではないかと。また「何が真の豊かさか」という最初に挙げました「あるべき近代性」、そういう社会や生活への根本的な問いや認識がやはり欠如してはいないかと思ひ、自分のデザイン観を呼びかけてみました。

デザインを社会的なものとして捉える哲学的視点（社会性）の欠如

それから、なお真のデザインの意味は定着したかということの根本的な背景に

なる問題ですが、日本では、人の尊厳や安心安全としての生の基盤についての思想とその制度設計が、やはり欠如しているのではないのでしょうか。

デザインを社会的なものとして捉える視点の欠如ということでは、次の二つの経験を挙げてみたいと思います。

一つは、ちょうど1957年の夏に私はフィンランドのカイ・フランクさんのヌータヤルヴィのガラス工場のある山荘でしばらくお世話になって、デザインの意味について制作物を通して多くのことを学ばせていただきました。その翌年に通産省の産業工芸試験所が日本のデザイン振興のためにカイ・フランクさんを招いてセミナーを開きました。

そのさい、全体のセミナーが終わった成果を見て、カイ・フランクさんが、「皆さんずいぶん一生懸命におやりくださったけれども、まことに残念なのはデザインを社会的なものとして捉える視点というのが欠如している、それが残念です」という話をされました。

それに対して「私は会社の中でこういうものを作って大変よく売れました。売れたから、私は会社にも社会にも貢献しています」と。そういうかたちの応答が多かった。フランクさんは「それは広い意味では社会的な貢献かもしれないけれども、私たちはそれを社会的とは言いません。」と、その意味を種々説明されました。その社会的ということ概括すれば、その国の自然、風土、歴史、文化に根ざした固有のものである、と同時に近

代市民社会のプロダクトとして世界的にも普遍性をもつようなロングライフのデザインの質、あるいはデザインのあり方だということでした。

先ほどの言葉を使えば、内発性の問題と繋がります。フランクさんが当時盛んにいていたのは、ロングライフのものや、人間の生活の知恵から自然に生まれた社会性を持ったものが、日本には過去にいっぱいあるのではないかということでした。つまり、工業社会の市場の論理で、そうした生活や文化の思考の富を見失ってはならないという警鐘を鳴らしていたのです。

それから半世紀経って、実は2005年から2006年にかけて日本ドイツ年というのがある、東京ドイツ文化センターのプロジェクトで、一年間ほぼ月一回デザイン・ラボと呼ばれるドイツのデザイナーによる講演会とワークショップが開催されました。事務局としてこれを推進された北川フラムさんも日本と全くデザイン認識の異なることにたいへん驚いたことなのですが、講演会の後の企業のデザイン関係者の質問のほとんどがマーケティングの問題とか、何が売れるかという問題で、講演で話されたこととは全く関係のない質問が多かった。するとドイツ側のデザイナーたち誰もが「マーケティングは全く不要で、社会的に意義があり、生活や社会にとって新しいかけがえのないものになっていくことを目指して創造していけばよい。そういうものは人々に受け入れられるはずだ」というよ

About 50 years ago, I stayed for some time in a villa equipped with a glass workshop belonging to Kai Franck, a Finnish product designer, and learned the meaning of design through making things. In the following year, a seminar was held in Japan to promote design sponsored by the Ministry of International Trade and Industry inviting Kaj Franck. He praised the works by participants, but commented that the view to see design as a social element was lacking. Many participants said "I have designed this product and that product and they sold well. I contributed to my company, and also to society." But he said, "It may be a social contribution in one sense, but we do not call it designs of social value." Design as a social element should reflect the climate, history, and culture of a country, and at the same time, should have the quality to be universal in modern civil societies across the world. It should be spontaneously born out of one's life, or a piece

of wisdom as a result of one's specific culture.

From 2005-2006 when we celebrated the German Year in Japan, the Tokyo Goethe Institut organized a series of design labs combining lectures by German designers with a workshop. Questions by Japanese in-house designers from business corporations were mostly on marketing and well-selling designs, and few questions were asked about the contents of lectures. Answers from German lecturers in general were, "We are not much concerned about marketing, but we aim to design something meaningful to the society, and something that would be indispensable in people's life. If we continue to design in these ways, people will accept our designs."

Half a century has passed, the situation of designers has not changed much, and still we need to ask ourselves if designers have developed a perspective to see design as a social element.

うな、市場にとらわれない発言に終始したといえます。

半世紀経っても、事情はまったく変わっていない。ですから「デザインの真の意味は定着したのか」それから「社会的なものとして捉える視点が育ったのかどうか」ということはやはり考えざるを得ないと思います。

「何が真の豊かさか」という「あるべき近代性」への問いや認識の欠如

西欧での近代デザインの運動はどういうものだったのか。その一端をドイツ工作連盟を中心にお話ししたいと思います。日本でこのデザイン運動について語る場合に、これを主導した、ドイツ政府の官吏でイギリスを視察してきた建築家のヘルマン・ムテジウスの思想や活動から出発するのが一般的です。

2002年に京都と東京の近代美術館で初めてドイツ工作連盟の大規模な紹介の展示会が開催されました。この展示会もヘルマン・ムテジウスを中心としたものでした。ムテジウスが日本に来たことがあって、そういう視点にも光を当てた展示会としてたいへん興味深いものだったと思いました。しかしドイツ工作連盟を主導的に創設して推進した二人の政治家にはほとんど触れられていませんでした。ここでは、この二人の政治家を紹介したいと思います。

一人はフリードリッヒ・ナウマンです。彼は、近代産業革命以降の機械化の中で、物をつくる人々の手仕事が失われ

て、マイスターたちのつくる喜びというものもがどんどん失われていった。そういうマイスターたちの尊厳や喜びを再興するような運動体がなければ、工業化社会における新しい物の質は創出しえないだろうという考え方に立脚していました。そういう人たちの生活自体や尊厳をしっかりと支える運動や制度がなければだめだと。この人は神学者ですけれども、今のEUのベースになっている中欧統合案の主唱者の一人で、ドイツ民主党の党首となり、ヴァイマル憲法の作成にも尽力した人です。

もう一人はちょうどナウマンと親子ほども年が違う若いテオドール・ホイスです。ホイスはナウマンの政治思想に非常に影響を受けた人です。この人は哲学、美術史、政治学などを勉強しています。このホイスもドイツ民主党の代議士となり、第二次大戦後は西独のコンラート・アデナウアー首相の政権期の初代大統領でした。ドイツ工作連盟創設時の事務局長、理事を務め、ドイツの近代デザインの理念づくりとその運動の推進に尽力した人です。またアデナウアーがドイツ工作連盟の主要なメンバーであったことも注目に値します。

先ほどドイツ、フランス、北欧など、セントラルヨーロッパとロシア構成主義との関係の話がありましたが、その考え方の違いは、例えばナウマンの思想に端的に表れています。彼の場合には、マルキシズムとは異なるリベラルな観点から、資本主義と社会主義との協調に基づ

く社会的、経済的な政策を展開したという点にあります。その中心課題は近代化が生み出した資本家に対する「労働者」という概念の「物をつくる人々」の社会的境遇や環境の改革であり、その尊厳の回復でした。

ドイツの場合には、中世以来の職人のギルドが崩壊の危機に直面しました。近代の工業だけに任せて、生産過程の一部だけを扱っていく労働者だけになってしまった場合には大変なことになる。職人は自らの身体全体で物をつくる。しかも、生産プロセス全体を身体化している。暗黙知ともいえる身体知をもって物をつくっている。工業化の中でも、こうしたマイスターたちの存在はきわめて重要で、こうした物をつくる人たちの社会的境遇や環境の改革、その尊厳を回復することが非常に重要な課題だということです。ナウマンにとって工作連盟設立の第一の目標は、生産品や生活環境の質の向上という課題の実現によって、近代産業における工作・生産労働の本質的意味や「物をつくる心」の喜びや創造性、その誇りや尊厳を再興することでした。そして、その政治制度を創造していくことで

パウハウスでも、グロピウスの創立宣言は、芸術家と職人との間を隔てる壁は何一つない。私たちは新しい工業化時代における新しいギルドをつくらう、全ての職種の統合が必要だと呼びかけています。

西ドイツで大戦後間もなく制度化され

* Lack of quest and recognition for "desirable modernity" of "true richness"

In discussing the design movement by the Deutscher Werkbund, it generally begins with the ideology and activities of architect Hermann Muthesius who led the movement. When the exhibition of the Deutscher Werkbund was held in Kyoto and Tokyo in 2002, the focus was given to Hermann Muthesius. But little reference has been given to the two politicians who established the organization and promoted its movement. One is Friedrich Naumann, who was a politician and the chairman of the Germany Democratic Party, and theological scholar as well. He saw that in the process of mechanization after the Industrial Revolution, craftsmen's work decreased, along with this, masters were deprived of their pleasure of hand-making things. He advocated that unless the movement aimed for the restoration of their

dignity and pleasure, new quality in products will not be created in industrialized society. He insisted on the need for movements or institutions supporting their living as well as their dignity.

Another one was Theodor Heuss. He was strongly influenced by the political ideology of Friedrich Naumann. He was a member of parliament representing the Democratic Party. After World War II, he served as 1st President of West Germany under Prime Minister Konrad Adenauer. At the same time, acting as Secretary General and a board member of the Deutscher Werkbund, he devoted himself to constructing the concept of design and to promoting the design movement. For F. Naumann, the primary goal of establishing the Werkbund was to restore the pleasure of making things, and creativity and dignity of workers through enhancing the quality of products and living environments, as well as to establish systems with political support to encourage people

Voice of Design トークサロン3 向井周太郎さんと2時間「今、デザインの原点から再考する」

た労使共同による経営の「共同決定法」というのがあります。これはナウマンの構想です。ナウマンに連帯感をもった第一次大戦後のヴァイマル・新生ドイツ共和国の復興大臣、後に外務大臣となったヴァルター・ラーテナウがいますが、その経済思想などにも由来しています。

ラーテナウの場合には「共同経済」という新しい経済理念を提起するわけですが、これは経営者と労働者が社会の福祉と繁栄に対して共通の責任をもつ、共に社会的なパートナーシップを自覚する新しい資本主義を構想したものです。この思想は同時代の日本の社会学者や経済学者に強い影響を与えましたが、その日本の研究系譜は戦後アメリカから入ってきた経済学や経営思想によって萎えてしまいました。

この「共同決定法」は、先年、EU諸国全体に導入されました。ただしそれぞれの国の発展の段階など、先ほどの内発的問題に基づいてそれぞれの特質をつくっていくということになっています。

日本では、西欧のデザイン運動が美術史の流れの中のデザイン史という文脈でのみ語られてきています。そうしたデザイン史では、例えばベルリンのアルゲマイネ電気会社（AEG）の製品としての電気ポットやアーク灯からタービン工場の設計をはじめ、タイポグラフィや会社案内（Fig.8~11）からカタログと、今でいえば企業のトータルデザインを先駆けたペーター・ベーレンスと、このアルゲマイネ電気会社の設立者、エミール・



Fig.8 AEG 電気ポット 1902年
ペーター・ベーレンス デザイン
AEG Electric Pot designed by Peter Behrens, 1902

ラーテナウとの関係は記述されていません。1907年にベーレンスはこのエミール・ラーテナウにより同社の芸術顧問に招かれたとして。しかし、すでに同社を引き継いでいた息子のヴァルター・ラーテナウと先に述べた彼のドイツ復興における経済政策や政治経済思想の社会背景については語られていません。

人の尊厳や安心・安全としての生の基盤 についての思想や制度設計の欠如

ドイツ工作連盟の名付け親であって推進者であったテオドル・ホイスが戦後1951年にシュトゥットガルトのドイツ工作連盟大会で行った「質とは何か」という記念講演があります。その内容は回想録的な趣とともに、このデザイン運動の生き生きとした時代証言として今なお啓発的です。

この講演で、特に私の記憶に深く刻まれている内容は、ナウマンの、その情熱を記す回想と、「生」の基盤の「質への問い」の先覚者・イギリスのジョン・ラスキンの政治経済学への記憶の喚起とそ



Fig.9 AEG タービン工場外観 1908-9年
ペーター・ベーレンス デザイン
AEG Turbine Factory (exterior) designed by Peter Behrens, 1908-09

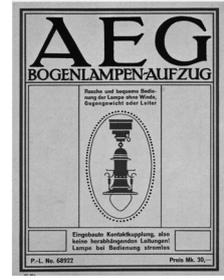
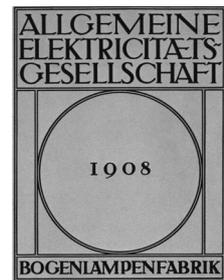


Fig.10

Fig.11

Fig.10 AEG アーク灯 新日モデル
上：新モデル ペーター・ベーレンス デザイン
1912年
AEG Arc Lamp, New and Old Models
Upper: New Modelle designed by Peter Behrens, 1912

Fig.11 AEG 製品事業別案内の表紙 1908-09年
ペーター・ベーレンス デザイン
Cover of AEG Catalogue designed by Peter Behrens, 1908-09

Fig.2,3,6,9,11 ドイツ工作連盟100周年記念展図録「100 JAHRE DEUTSCHER WERKBUND 1907;2007」より

concerned to that effect.

At Bauhaus, the statement for its establishment says that there is nothing that separates craftsmen from artists, and it calls for the forming of new guilds in an age of industrialization, and for the integration of all artists and craftsmen.

* Lack of quest for "Ideology on the foundation of life to ensure human dignity and safety and Design of the System"

Theodor Heuss, who gave Deutscher Werkbund its name and promoted the movement, delivered a memorial speech on "What is Quality" at the convention of the organization in Stuttgart in 1951. He said in his speech that it was not the Werkbund that first began to question the quality of foundation of life. He mentioned John Ruskin of Great Britain as his predecessor, and wrote many books on Ruskin's political economics. He said, "True wealth will

not be built without life," and stressed the importance of establishing the foundation for life in the center of economics.

If design is intended to build the universal foundation for quality living, it is easily understood that design is a social and civilized endeavor. The ideology and activity of these two politicians, Friedrich Naumann and Theodor Heuss who were deeply involved in the foundation and promotion of the Deutscher Werkbund left us a clear message on what their design movement was. From their efforts, I consider that design is closely related with political and economic ideologies on how to understand design.

の「質とは何か」というホイス自身の見解です。ラスキンの政治経済学とは、あの有名な「生なくして真の富は存在しない」という言葉で象徴されるものです。

ドイツでも、同時代にはアダム・スミス以来の近代経済学のあり方に疑問をもったフリードリッヒ・リストが国民の福祉を前提とした財政学の原点となる経済学を提起します。ドイツではこれを国民経済学と言います。民のための内発的な経済学です。ホイスはラスキン政治経済学は、まさにドイツで言う国民経済学であると共感を深めたのでした。ホイスは若い時にイギリスに行き、ウィリアム・モリスの足跡もよく調べていました。

ホイスは、時代の変遷の中で工作連盟の追究した「質とは何か」と問えば、「質とは」簡潔に言って「ダス・アンシュテンディゲ (Das Anständige) である」と答えます。この言葉は私には日本語ですと「誠実な礼節の態度」と聞こえてくるのです。人としての尊厳を守る過不足のない誠実な質の規範、そんなふう言い換えられるのではないかと思います。

この言葉の現実化は、すでに1950年代に工作連盟が推進したゆとりある人間的な生活基盤としての住宅の広さの質の規範一つだけ見るだけでも明らかです。日本の極めて貧しい2DKという戦後の住宅政策とは根本的に異なる、目を見張るような質の規範のデザインであったと言えます。

しかも、その背景には、資本主義社会

であっても「土地を市場の法則外」と規定することで人々の生活基本権を守る「土地」の社会的共通資本としての政治・経済思想と制度化があったのです。それとあわせて建築法が地表土の保護というエコロジカルな観点を制度化していたことも重要です。暉峻淑子さんが『豊かさとは何か』（岩波新書）の中で言っていることですが、日本の地価はドイツに比べて100倍の差があると。

デザインが万人に等しく生活基盤の質の形成を目標にするのであれば、デザインは広く社会的な、かつ文明的な課題であることがわかります。ドイツ工作連盟の設立と推進に深く関与したこの二人、ナウマンとホイスの思想と行動はまさにそのことを、デザイン運動とは何なのか、また、何であったのかということ私たちに伝えるものではないかと思えます。ですからデザインのあり方というのは、デザインをどう捉えるかという政治の思想とも、経済の思想とも深くつながっているものだと考えます。

第3フェーズ 講演

「生」の全体性としての生活世界の形成とデザイン

向井 私がデザインというのは「生の全体性としての生活世界の形成」だという言葉方を繰り返してきているものですが、それを佐野先生が取りあげてくだ

さって3番目のテーマになりました。

産業や経済、市場のためのデザインというものから、もちろんそれも重要なことですが、むしろその前提としての生きる基盤を形成する総合的な知、私はこれを「生命知」とか「生知」と呼んでいますが、そういう「生知としてのデザイン」、「生」を第一に据えた社会への転換へ向かうことが必要ではないかと考えています。

戦後日本はアメリカを通してしか世界を見てこなかった。世界はもっと多様なだけでも、一元的にしか見てこなかった。それが今日の閉塞感を生んでいるのではないかと考えています。このフェーズでは、3つの項目、一つは「日本の近代化再編の必要性－内発的発展の視点から」と「自己再生的文明の形成とデザイン－自省の文明の形成に向けて」それから「「生命知」ないし「生知」としてのデザインへ」ということについてお話しします。

日本の近代化再編の必要性

－内発的発展の視点から

近代デザインの真の意味に接し、その運動の種々のプロジェクトに関与してきた私にとって、絶えず念頭にあって深く考えさせられたことは、日本の近代化の問題でした。このことでいつも想い起こされるのは、1911年、明治44年に和歌山市で行われた夏目漱石の「現代日本の開化」と題する講演の中のとりわけ有名な言葉である「西洋の開化（近代化）は内

Phase III. Design for the World of Life Encapsulating the Wholeness of Human Living

MUKAI: I have been saying that design should aim for the world of life encapsulating the wholeness of human living. Designs for industrial and economic purposes, and for the market are important, but I consider it more important that design should direct the society in which the first priority is placed on the foundation of people's living. I call this "knowledge of life."

* Need for restructuring Japan's modernization process – from the viewpoint of spontaneous development

In 1911, Natsume Soseki, a writer, gave a lecture in Wakayama under the title of "Enlightenment of Modern Japan" and expressed his view that the west was enlightened (modernized)spontaneously

while Japan was enlightened by outside force. Natsume illustrated spontaneous development likening it to the growth of a tree on the ground.

As a matter of fact, Japan opened its doors in the Meiji era to respond to external pressure. The modernization process of Japan was also the process of westernization extrinsically. The development after WWII was achieved extrinsically looking to the United States as a model and also under its pressure. Natsume advocated a spontaneous process of development a century ago, and I think this is still a compelling issue for us.

In the 1970s, attempts were made to create theories in Japan to review economics through looking at the relations between society and life, instead of economics to explain conventional economic activities. The difference between agriculture and industry began to be explained from economics.

発的であって、日本の開化は外発的である」という見解です。

確かに日本の明治の開国は外圧によるもので、その近代化、文明開化はまさに外発的な西洋化の過程である。この戦後の60余年にしてもアメリカを手本として、その外圧のもとでの外発的な発展の過程であったと言えると思います。さらに、漱石はいわゆる近代化、「開化の推移は内発的でなければ嘘だ」、したがって日本の開化はそのような外発的なものゆえに、「皮相上滑りの開化である」と呼んだのでした。この漱石の問題提起は今日なお切実な課題であると思います。

この漱石の問題提起は、3.11を契機に多くの場面で取り上げられてきましたが、注目したいのは、戦後日本の反省期でもあった1970年代から80年代にかけてポスト・モダンの波をよそに、社会学、経済学、思想史などの立場で、日本の近代化や世界の近代化そのものを捉え直す固有の理論的な創出が試みられてきたことです。

その主な試みを二つ挙げますと、その一つは、社会学者・鶴見和子氏の「内発的発展論」という近代化理論の極めて先覚的な提起とその展開の広がりです。内発的発展のあり方を漱石がちょうど種から芽を出し葉を広げ、開花していく植物の生成変化になぞらえたように、こうした内発的発展論の潮流から、日本の近代化が見過ごしてきた地域固有の大地に根ざした文化の生命性が捉え直されてきました。

もう一つは、在来の経済活動を中心にすえた経済学ではなく、社会と自然、社会と生命との接点を見つめて、生命系を根底において経済学を見直し固有の理論を創出していく試みがこの頃から生まれてきます。なかでも、玉野井芳郎氏の試みがその代表的なものと思っています。農業と工業の本質的な差異というものが経済学から言及されてくるのもこの頃からです。そういう意味で、近代経済学の諸論考を見直すうえでも、地域社会と内発的発展の問題を考えていくうえでも、たいへん啓発的です。

この日本の潮流は一時デザインの領域でも話題になったシューマッハーの『スモールイズビューティフル』（講談社学術文庫）の問題提起と同時代であるということもたいへん注目すべきです。イギリスではシューマッハーの思想を継承して、自然・生命・人間のシステムを中心にすえた諸科学横断性のなかでデザインを位置づけたホーリスティック(全的)な生態学的教育プロジェクトが展開されはじめています。これも、内発的発展論と強く共振するものです。日本も産業や経済、市場のためのデザインからの大転換が必要で、このことは改めて言うまでもないと思います。

自己再生的文明の形成とデザイン

— 自省的文明の形成に向けて

1990年代に、二つのたいへん貴重な体験をしました。その一つは、中欧復活の宣言ともいえる中欧デザイン会議とそれ

に続くEUデザイン会議と、いま一つはドイツ工作連盟のプロジェクトの経験で、その後者の問題を紹介したいと思います。それは新たなモデルネとしての運動で21世紀のあるべき生活世界の理念と問題を考えて提言する「文明ラボラトリウム」というプロジェクト（1991年～1996年）でした。

20世紀最後の10年の始めに当たって、ドイツ工作連盟が1991年11月1日、2日と、ドイツ・ヘッセン州ダルムシュタットの芸術家村で、21世紀の生活世界のために「文明の在り方を検討する国際的なラボ(文明ラボラトリウム)を発足させよう」という構想討議のための国際会議を開催しました。その構想討議の招待スピーカーは、ドイツ、オーストリア、イタリアなどヨーロッパ圏から23人と日本からの私とで、それぞれ人文・社会・自然科学、芸術、建築、デザインの専門家たち、さらに政治・行政、企業、市民団体、ジャーナリズムなどからオブザーバー40人を加えて、その構想をめぐって、夕食後も含むまる二日間、たいへん活発な討論が交わされました。

ダルムシュタットの芸術村が建設されたのは、19世紀最後の年から20世紀初頭にかけてで、イギリスのヴィクトリア女王の孫にあたるヘッセン大公ルードヴィッヒの構想が実ったものでした。ラスキンやモリスのアーツ&クラフツ運動に啓発された大公は、ヘッセンの生活工芸の質を高めることでこの大公国の、ひいては統一間もないドイツの文化と経済

In parallel to this move in Japan, "Small is Beautiful" by Ernst Friedrich Schumacher became popular. It was provocative also in the field of design. Succeeding his thought, the holistic ecological education project has been conducted in Great Britain. In this project, design is considered in an interdisciplinary sphere of sciences with the system of nature, life and humans in the center. This educational project resonates with the spontaneous development theory. In Japan, conventional industry, economy and market oriented design must go through a great transition.

* Formation of self-regenerative civilization and design — toward the formation of a reflexive civilization

In the 1990s, the Deutscher Werkbund initiated a project called "Civilization Laboratorium" in order to consider a new "Moderne" movement for the world in the new century. In November 1991, it

organized an international meeting in the Artists' Colony in Darmstadt to discuss the establishment of an international laboratory. More than 20 speakers who were professionals in various disciplines were invited from countries in Europe including myself from Japan. In addition, there were representatives from political parties, government, corporations, civil organizations and the media. I brought with me a paper titled "Formation of self-regenerative civilization and design." It illustrated the structure of present-day civilization based on multi-layered technologies. The civilization in the 20th century has branched into various specialties, and people in different specialties speak using their specific terminologies. These specialties are not connected with one another. However, at the bottom of specialties is the world of life which is deeply connected with our bodies. I attempted to present a new possibility for technological civilization (second



Fig.12 左：ダルムシュタット芸術家村 オルブリッヒ自邸 1901年
ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ 設計
右：ダルムシュタット芸術家村 ベーレンス自邸 1901年
ペーター・ベーレンス 設計
Left: Olbrich House in Darmstadt Artists' Colony, designed by Josef Maria Olbrich, 1901
Right: Behrens's House in Darmstadt Artists' Colony, designed by Peter Behrens, 1901

に寄与しようと考えて、世紀末ウィーン文化の担い手の一人ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒやミュンヘンのペーター・ベーレンスなどの芸術家を招いて新しいアーツ&クラフツ運動のセンターとしてこの芸術家村を建設したのでした。芸術家たちの共同アトリエ・ルードヴィッヒ館と住宅が建てられて、ここを拠点に新しい良質工芸のさまざまなデザイン提案が展開されていきました (Fig.12, 13)。そういう記念すべき地で21世紀の生活世界の理念を考えるプロジェクトが始まったことは、またたいへん意義深い出来事でした。

この会議は、前夜の打合せ会で起案者のモイラーの草案に対する見解として用意してあった私のペーパー「自己再生的文明の形成について」を冒頭の問題提起として始まることになってしまいました。この内容は、現代文明の構造についての現状認識を前提に、その多層的な文



Fig.13 上：ダルムシュタット・マティルデの丘・芸術家村の共同アトリエ・ルードヴィッヒ館と大公成婚記念塔
ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ 設計
下：ルードヴィッヒ館正面入口。このマティルデの丘のうえにある芸術家村は、現在ユグントシュティル美術館として公開されているルードヴィッヒ館や芸術家の家々とともに、市民のこころ安らぐ散策や憩いの場となっている。
Upper: The Ludwig Hall, atelier, and the Wedding Tower designed by Josef Maria Olbrich in the Artists' Colony on the hill of Mathildenhöhe.
Lower: The main entrance to the Ludwig Hall. The Artists' Colony on Mathildenhöhe is now used as a park. It embraces the Ludwig Hall now used as the Jugendstil Art Museum and artists' houses.

明構造の根底にある原初的な自然の大地に根ざす生活世界の循環リズムと同期して自己再生を果たしていくような技術文明（第二の自然）の新たな可能性を試論として述べたものです。幸いその試論はポジティブに受けとめられ活発な討論の口火となりました。

この構想討議では、先に述べた近代デザイン運動が技術や産業や資本主義経済による近代化のあり方を社会的・文化的な視点から絶えず問い直して、生活世界

を豊かに再構築していくという近代化に対する近代性の形成に向けた、一種の対抗的なプロジェクトであったということも再検証されました。こうした観点から見ると、1920年代のバウハウスの運動も、戦後のウルム造形大学 (Fig.14) のデザイン運動も、デザインが産業に寄与しながらも、世界形成の思想としてデザインの手法そのものが批評の武器であり得たことがよく分かります。その歴史背景が今日なお市場至上主義の暴走や消費社会の肥大化を抑制する社会の力となっているのです。

この討議では、工業先進国のものの過剰と南北格差、しかも南北格差のなかにさらに南南格差もあります。こうした図式の中で、デザインが様式や造形を通して社会的、倫理的な規範をもはや示し得ない今日の時代状況にあっては、それを超えた生活世界の形成のための新たな挑戦が必要になるだろう。会議では「近代化」をあらためて「不断の反省にもとづ

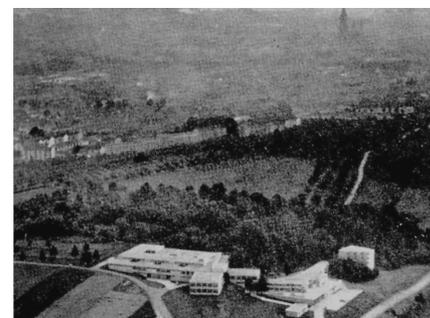


Fig.14 ウルム造形大学校舎、上空より。
オトル・アイヒャー 撮影 マックス・ビル 設計
1955年 (『デザインの原点』日本能率協会より)
Aerial view of the Building of Ulm School of Design, designed by Max Bill, Photo by Otl Aicher, 1955.

nature) to be synchronized with the cycle of the world of life based on nature, and to regenerate itself.

Through this project, we assessed that the "Moderné" movement has checked the process of modernization by technology and industry from social and cultural perspectives, and has attempted to build a better world of life. In this way, Bauhaus in the 1920s and Ulm's (Fig.14) design movement in postwar days provided a means for criticism of design while making contributions to industries.

There was shared recognition of the real world: the affluence of things in industrialized countries and the gap between North and South, and between South and South. In such a structure, design could no longer present a social and ethical norm through styles and forms. At this meeting, "modernization" was conceived a new as a self-recursive process," and a new concept of the creation of

"reflexive civilization" became a compass of the project.

* Aiming for design as "knowledge of life"

I have repeatedly advocated that design should be applied "to create a more desirable world of life that encapsulates the wholeness of human living. In order to symbolically show this concept, I prepared a "Constellation of Life." (Fig. 15)

I consider that "design is a mechanism to shed light on the hopes of a society," and that, in particular, design education is an important factor.

What does "knowledge" mean in terms of design? It is not simply a specific type of knowledge held by professionals. If the role of design is to create the world of life as a whole, knowledge may of that of life. I consider "design is a specialty without specialization." In turn, it implies that design has no genre

Voice of Design トークサロン3
向井周太郎さんと2時間「今、デザインの原点から再考する」

く自己回帰的プロセス」として捉え、「自省的文明の形成 (Reflexive Zivilisation)」という新たな概念の適用が、このプロジェクトの羅針盤になりました。

「生命知」ないし「生知」としてのデザインへ

私は、デザインは、「あるべき生活世界の形成である」しかも、「あるべき生の全体性としての生活世界の形成である」という見解を繰り返してきました。「生活」とは「生」の全体性、「生」という語義の全体をその中に包含するものです。生活世界の「生活」とは、このような「生の全体」を指すのです。日本語における漢字の「生」は、欧米語の同義を含みながらも、より「生」の根源性としての「生成」や「生命」の誕生を意味する「なる」や「うまれる」という語義を源泉として、より強い生命との連関性、自然の一部であることの意味を基底においています。それをシンボリックに示すために「生」のコンステレーションという星座をつくってみました (Fig.15)。

私は、「デザインとは、あるべき生の全体性としての生活世界の形成」と絶えず「あるべき」という言葉を繰り返してきてきました。理想主義だと言われるかも知れませんが、私たちの生にとっては、「希望」とともに「希望」を照らして歩んで行くことが大切なのではないのでしょうか。私は、「デザインは社会の希望を照らし出していく生成装置である」とも

言うてきました。とりわけその中でも、デザイン教育は、そういう希望を照らし出していく重要な生成装置であると考えます。

デザインの「知」とは何か。これは単なる産業上の一つの職能知ではありません。デザインの役割が「生」の全体性としての生活世界の形成であるのだとすれば、それは生の知、生命的な知だといえます。そのような「知」は全体知、総合知とも言い換えられます。私は「デザインとは専門のない専門である」という指摘をしてきました。教育においても、そのような教育システムを展開してまいりました。デザインとは、本来、ひとつの専門に特定し得ない専門性であって、種々の専門の関係性、問題の関係性全体やプロセス全体の総合性に、その専門的な特質があるのだと主張してきました。

そのことは、同時に、デザインには領域がないという主張になります。つまり、デザインは分けられない。そのことは、デザインという行為が「生」の全体性として向き合っているからで、そして「生」そのものであるからです。

デザインが在来の観念による「芸術」や「技術」や「学問」あるいは「科学」といった捉え方の枠組みを超えた、科学も、芸術も、哲学も、技術もひとつに含みもつ自然と共振する社会的・文化的な想像力にもとづく創造行為の世界であるからです。

私は、近代デザインの意味と同時に、デザインという行為を人間の根源的な表象行為として、人類史を遡って捉えてくる視座も必要だと考えています。デザインに携わる人たちはそうした観点から自信と誇りをもって一人一人デザインの意

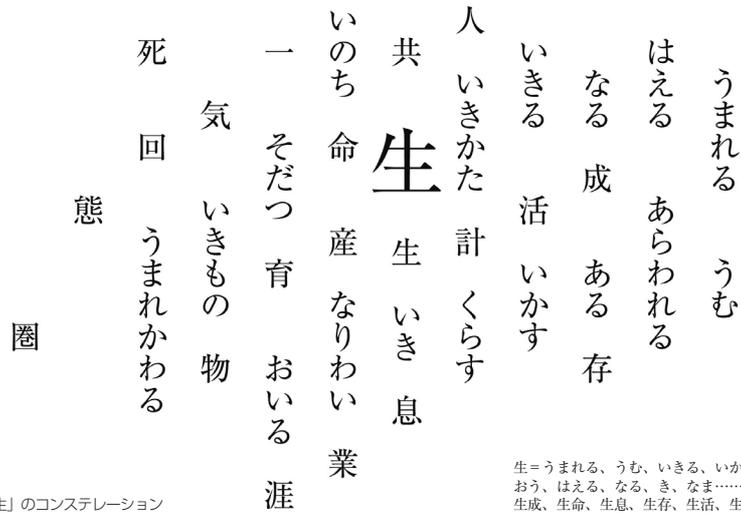


Fig.15 「生」のコンステレーション
Constellation of "Life"

生=うまれる、うむ、いきる、いかす、いける、おう、はえる、なる、き、なま……
生成、生命、生息、生存、生活、生計、人生、生産、生業、生涯、生物、生園、共生、回生。

boundaries. Design surpasses the conventional concepts of "art," "technology," "learning" or "science," and it is an act of creation, embracing all these frameworks, based on social and cultural concepts that resonate with nature.

We need to retrospectively understand the act of designing as the innate presentational act of humans. I always tell my students that those who are engaged in design should discuss with confidence the meaning of design from this perspective, and should also have power to change even politics.

Q & A Session for Phases II and III

Kazuo TANAKA (floor): I am hopeful that the March 11 Earthquake has given the Japanese a chance to be squarely faced with the concept of the creation of the world of life as you mentioned.

MUKAI: We should have been already aware of the need, but I think that the earthquake awakened us in terms of design. Therefore, we need to discuss this issue at the time of great transition. But there are very difficult problems involved. For example, the problem of land ownership is complicated in Japan. In Germany and other European countries, the trade of land lots is conducted outside the market rules and regulations. But in Japan, there are problems of the social systems, and land owners and leaseholders make the rehabilitation of the affected land difficult. We cannot just move to somewhere and build new houses there.

味を語って行って欲しい。それは同時に、政治さえも変えていく力として語って行って欲しいと、いつも私は学生たちに呼びかけています。

第2・3フェーズ 質疑応答

田中一雄 (会場) 3.11ということが、今日先生が話されたあるべき生の全体性としての生活世界の形成ということに初めて日本が向き合う契機になるのではないかと希望を私は持っています。その点について、3.11がデザインというものに対して何をもたらしてくるのか、先生のお考えを伺えればと思います。

向井 それはすでに我々が自覚していなくてはならなかったことだと思うのですが、実際これを契機に改めてデザインという行為にとって生知の覚醒が促されたのではないのでしょうか。ですから、まさに大きな転換点として、それをしっかり語っていく時だと思います。しかし一方で被災地の再生にとってたいへん難しい問題を孕んでいると思うのは、例えば、先のドイツなどの例では土地が市場の法則外ということになっていますね。

ですからドイツでは地域社会がしっかり保全されていて、そのコミュニティというのが生きています。それと同時に時代の変遷の中で都市や地域社会の再生計画とその推進というものが極めて長期の

計画性をもってやられています。

日本では地権者などの問題がたいへんなのではないのでしょうか。そういった社会の制度変革の問題も必要です。単に場所を移動して箱をつくれればいいということだけの問題ではないものですね。

野中宏親 (会場) ここにタイトルが「シリーズ 今の共有」と書いてありますね。日本でもデザインで言葉の意味の共有がまったくなされていません。世界でもなされていない。今、何が重要かと言うとデザインの共有ということが重要だと思います。もう遅いかも知れません。しかし今からでも遅くないから絶対にやらなくちゃいけないと思う。

大倉富美雄 (会場) 大きな問題としては、これからは政治ですね、政治の中でもシステムですね。日本に合ったシステムをつくっていくことが重要で、それはデザイナーには難しいと思うので、デザイナーはそういう人たちを連れてきてそういう研究グループに加わらせて、デザイナーのイニシアチブでもっていくと。そういうシステムみたいなものを考えていかないといけない。それは今話にあったバラバラではいけないよという話とつながってくるのですけれども、そういうかたちで考えていくということです。3.11があって田中さんがおっしゃったように日本は今、転換点に来ていると思う。

上山良子 (会場) 生と知ということ、

それからさっきおっしゃった大地を私は扱っているランドスケープアーキテクトですけれども、本当に大地を忘れてデザインというのが先行されているこの日本。今、みなさんおっしゃっておりますけれど、こういうことでもいいのかということをお聞きしたいです。この国をいい方向に、デザインという非常に重要な希望の原点にもう一度立ち直っていくことをよろしくお願ひいたします。特に教育ということで、私も3月まで教育の場におりましたものですから、本当にそういう意味では重要だと思います。

佐野 ありがとうございます。時間がきてしまいました。今、毎週金曜日は反原発デモをやっていますが、我々も毎週金曜日に集まってデザインの議論をやりたいですね。そういうことで積み重ねていく、実体化する、そういう時ではないのでしょうか。今、お聞きしてそう思いました。また、日本デザイン機構では企画を立てますので、ぜひ皆さんおいで下さい。(文中、敬称略)

向井周太郎 (むかいしゅうたろう)
1932年東京生まれ。インダストリアルデザイナー。早稲田大学商学部卒業後、ドイツ、ウルム造形大学でデザインを学ぶ。同大学およびハノーバー大学インダストリアルデザイン研究所のフェローなどを経て、1967年設立の武蔵野美術大学・基礎デザイン学科を起案し、新しいタイプの人材育成とデザイン学の形成に力を注ぐ。現在、武蔵野美術大学名誉教授、国際デザイン研究評議会(BIRD)委員、基礎デザイン学会会長、日本記号学会理事など。著書に『デザインの原点』『ふすま 文化のランドスケープ』『生とデザイン かたちの詩学Ⅰ』『デザインの原像 かたちの詩学Ⅱ』『デザイン学 思索のコンステレーション』など。

Fumio OKURA (floor): A great problem is the political system. We need to build a political system suitable for Japan. But it is too difficult for designers to do alone, so we should set up a study group in which various experts are invited, and take leading roles in the study. Now that Japan is at a turning point, it would be timely to establish a new system.

Ryoko UYEYAMA (floor): Being a landscape architect, I have been worried about the situation in Japan in which visible designs have been emphasized giving little attention to the ground. I hope that you will take a lead in reconsidering the role of designers to direct this country for the better.

事務局から

第16期通常総会

2012年6月28日(木) 15:30~17:00アルカディア市ヶ谷私学会館において日本デザイン機構第16期通常総会を開催しました。2011年度事業・収支報告および監査報告、2012年度事業・収支計画が討議の結果承認されました。2011年度後期より実施したVoice of Designトークサロンへの期待、充実している機関誌の定期刊行物化の可能性の検討、同じような活動をしている他団体との連携、会員構成を強化させる策、そして改めてデザインのミッションなどを確認するための世界を視野においた調査実施などが検討されました。

Voice of Designデザイン・カフェ

本号に収録したVoice of Designトークサロン「大宅映子さんと2時間」の中で次のような話題ができました。大宅さんから「若い世代との間に分断を感じていった話や、大きなビジョンというものは必要なくて、身近なことでも良いので一人一人がビジョンを持つことが大事」という話。また参加者から「今の学生もいろいろ考えているけれど、経験も知識もなくその考えに自信を持ってないので声を出せない、という実状がある」という意見などです。

そこで、1)自由に意見を言う、2)テーマを共有する人を発見する、ということを目指し、近年そうした場として注目さ

れている「ワールド・カフェ(注)」という話し合いの場にならって、メンバーの組み合わせを変えながら、4~5人単位の小グループで話し合いを続ける「デザイン・カフェ」とも呼ぶべき場「話し合いのしくみ」を考える/一人一人が自由に声をあげる市民社会のデザイン」を、総会の期日に併せて実施しました。この会合に先立ち「ワールド・カフェ」を日本に紹介し、その実践を手掛けているワールド・カフェ・コミュニティ・ジャパン副会長の大川恒氏から「ワールド・カフェ」についての説明をいただきました。

注)ワールド・カフェ Juanita Brown(アナータ・ブラウン)とDavid Isaacs(デイビッド・アイザックス)によって、1995年に開発・提唱された話し合いの手法。「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話をを行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいている。



編集後記

陽明学の「知行合一」を考えるだけでなく実践して意味をもつと誤解されることが多い。朱子学の「知先行後(「知」が先にあって「行」が後になる)」に対

する思考というところからそうした解釈が生まれたと言われている。しかし王陽明の説くところは「知は行の始めにして、行は知の成なり」と。

本号特集のサロン2で語られた「ビジョン」は「市民の知」と読み替えることもできよう。またサロン3で提起されたのはまさに「生命知」。この「知」に対し「行」はその実践。そしてサロンの根幹テーマ「今の共有」とは「今を知る」ということになろう。そうして共有した「知」は「実践」と不可分ということになる。さらに考えを進めれば「知」を得るためには「行」すなわち「体験」それも日常の生活体験の中で研磨することが肝要ということになろう。

大宅さんの「身近なことでも良いので一人一人がビジョンを持つことが大事」や向井さんの「デザインは不可分」はまさに「知行合一」ということに他ならないと感じた次第です。(伊坂正人)

VOICE OF DESIGN VOL. 18-1

2012年10月12日発行

発行人/栄久庵憲司

編集委員/追田幸雄(委員長)、鳥越けい子、薄井滋、天内大樹、矢後真由美、西山誠、南條あゆみ(事務局)

翻訳/林 千根

発行所/日本デザイン機構事務局 〒171-0033

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F

印刷所/株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.18-1

Issued: October. 12. 2012

Published by Japan Institute of Design

3-30-14 Takada, Toshima-ku, Tokyo 171-0033 Japan

Phone: 81-3-5958-2155 Fax: 81-3-5958-2156

Publisher: Kenji EKUAN

Chief Editor: Yukio SAKODA / Translator: Chine HAYASHI

Printed by Takayama inc.

From the Secretariat

JD General Assembly

Japan Institute of Design (JD) held its 16th general assembly at Arcadia Ichigaya in Tokyo on June 28, 2012. It discussed and approved the Activity Report and Statement of Account for FY2011, and the Activity and Budget Plans for FY2012.

Voice of Design "Design Café"

JD organized a meeting called "Design Café" modeling it after the "World Café" devised by David Issac in 1995. It intended to provide people with an opportunity to 1) speak out freely, and 2) find others who share an interest in the same subject. It is a meeting style in which groups of 4-5 persons discuss a theme changing their members from time to time. JD Design Café was held on June 28, 2012 under the theme of "Considering the mechanism of discussion - Designing a civil society in which every person speaks out freely."

Editor's Note

The Doctrine of Wang Yong-ming, a school of Neo-Confucianism in China, advocates the concept of "the unity of knowledge and practice," meaning that true knowledge must be followed by practice.

The theme "vision" in Talk Show 2 can be replaced with "citizens'knowledge." The speaker in Talk Show 3 advocated the "knowledge of life." The general theme for the Talk Show series "sharing the present time" will mean to "know the present time." The knowledge we have shared should be inseparable from our practice. Oya suggested, "Every person should have a vision in their life," while Mukai said "There should be no genre boundaries in design."

The essence of the two speeches, I found, was the need for "unity of knowledge and practice." (Masato Isaka)